明日の学校をともに考えるベネッセの教育情報誌

全国の校長先生に無料で年4回お届けしています

VIEW21

ビュー21
2013
Vol.4
小学版

特集

主体的に学ぶ力を育む
――学び方の工夫で学習意欲を高める

総論　筑波大大学院人間系准教授 **外山美樹** ／ 東京都港区立芝浦小学校校長 **黒田泰正** ／ ベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室主任研究員 **邵勤風**

学校事例　秋田県湯沢市立湯沢東小学校／東京都世田谷区立砧南小学校／岡山県倉敷市立柏島小学校

展望　東京大大学院教育学研究科教授 **市川伸一**

特別レポート　「Teachers' cafe」第1回ワークショップ報告

私を育てた あの時代、あの出会い　大分県日田市立三芳小学校校長 **渕 健一**

Benesse発 これからの教育　宮城県富谷町立東向陽台小学校　動画の予習で臨む反転授業が密度の濃い45分をつくり出す

つながる 学校と家庭の学び　福岡県北九州市立企救丘小学校　家庭と共に子どもの自信を育み　安心した進級・進学につなげる

ベネッセ教育総合研究所　http://berd.benesse.jp

C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2013

Vol.4

小学版

特集

3 **主体的に学ぶ力を育む**
―― 学び方の工夫で学習意欲を高める

4 総論
深い児童理解に基づき、一人ひとりを温かく励まし自信と有能感を育む支援を
筑波大大学院人間系准教授 **外山美樹**／東京都港区立芝浦小学校校長 **黒田泰正**
ベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室主任研究員 **邵 勤風**

8 学校事例1
9年間を見通した一貫した指導で生活を安定させ、学習意欲を高める
秋田県湯沢市立湯沢東小学校

12 学校事例2
ICTの活用で思考や表現を促し、成功体験を積み上げて意欲を育む
東京都世田谷区立砧南小学校

16 学校事例3
予習を起点にした学び方指導で主体的な学習サイクルを生み出す
岡山県倉敷市立柏島小学校

20 展望
「分かる！ 出来る！」授業の実践と学習法の指導で、学力と共に主体性を育む
東京大大学院教育学研究科教授 **市川伸一**

24 特別レポート
小・中・高校の12年間を通じて教育課題を考え、語り合う
「Teachers' cafe」第1回ワークショップ報告

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い
2人の師の背中を追いかけて教師として大切なことを学んだ
大分県日田市立三芳小学校校長◎**渕 健一**

26 Benesse発 これからの教育
動画の予習で臨む反転授業が密度の濃い45分をつくり出す
宮城県富谷町立東向陽台小学校

28 つながる学校と家庭の学び
家庭と共に子どもの自信を育み安心した進級・進学につなげる
福岡県北九州市立企救丘小学校

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

http://berd.benesse.jp 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い
第15回

2人の師の背中を追いかけて教師として大切なことを学んだ

大分県 日田市立三芳小学校校長 渕 健一 FUCHI KENICHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、渕校長が語る。

ふち・けんいち　専門教科は算数。日田市立日隈小学校、日田市立羽田小学校、日田市立若宮小学校、日田市立桂林小学校、大分県教育委員会教育事務所長などを経て、現職。

- 1980（昭和55）新採として日田市立日隈小学校に赴任
- 1983（昭和58）日田市立羽田小学校に赴任。指導主事の池田具美先生と出会い指導を受ける
- 1990（平成2）日田市立若宮小学校に赴任
- 1992（平成4）上津江村立雉谷小学校に赴任
- 1994（平成6）中津江村立丸蔵小学校に赴任
- 1995（平成7）大分県教育委員会指導主事に着任。その後、学校教育指導課長、教育事務所次長に昇任
- 2005（平成17）日田市立桂林小学校に校長として赴任
- 2008（平成20）大分県教育委員会教育事務所長に着任
- 2011（平成23）日田市立三芳小学校に校長として赴任

My History

何度駄目出しをされても食らいついていった学習会

大学は機械工学が専攻で、教師を目指したのは卒業間際でした。書店でふと手にした『教育基本法』の「教育は、人格の完成をめざし……」の部分を読み、自分が生涯をかける職業は教師だと気付いたのです。通信教育で勉強し、小学校教師に採用されたのは26歳の時でした。

目の前の子どもをより良い方向に導きたい――理想に燃えていた私はがむしゃらでした。教育学を体系的に学んでいない引け目もあり、とにかく子どもと向き合い、経験を積んで自分の教育を築こうと考えました。

しかし、当時の私の授業は、スモールステップの発問・指示、解説をしていて、子どもに発表を促す私の声が教室に響いていました。一方、隣のクラスでは、子どもが目を輝かせ、自分の言葉で発言し、子どもの考えがたくさん生かされていました。注意深く見ると、授業の組み立てがうまく、児童理解と教材研究がしっかり出来ていることが分かりました。

どうすればそれがうまくできるのか。もがいていた教師4年目に出会ったのが池田具美（ともみ）先生です。指導

「『討論の成立した』授業をするのがプロの教師」

主事として来校され、指導案や授業を見ていただきました。池田先生の言葉は厳しく、「教師が子どもの発表力・討論力を養成できていない」「緊張感のある授業にもっていくための授業規律がなっていない」と何度も言われました。

それでもめげずに私は、池田先生が主宰する学習会に参加しました。月1回、小・中学校の教師7～8人が集まり、1人の指導案を題材に、めあて、教育課程、教材、授業展開は体系的か、児童理解と整合性はあるのかを討論しました。池田先生はよく「『子ども同士の討論が成立した』授業をするのがプロの教師。プロといえる教師は、『子どもの授業展開能力』をどのように養い・鍛えるかの技（指導法）を身に付けている」とおっしゃっていました。経験豊かな先生方と真正面から議論し、いろいろな技（指導）法を教えていただいた学習会は、自分の教育観と技能を磨くまたとない機会でした。

学んだあとは実践です。同僚たちに声を掛け、月3～4回は授業を見てもらいました。略式の指導案を渡し、発問の仕方、子どもの発問に対する受け答えなど、何でも意見を言ってもらい、自分からも授業を見に行きました。自分だったら、どう答えるか、どう発問するかを考えながら授業を見て勉強したのです。

展望がなければ決断は出来ない

児童理解と教材研究の大切さは、私が結婚時に養子となった母・初恵もよく言っていました。母は日田市で初の女性校長となった人で、大阪へ就職試験に行く生徒の付き添いを保護者の代わりに行うなど、どの子にも分け隔てなく労を惜しまない教師でした。また、後に見る人が教材研究に活用できるようにと、子どもの様子や授業内容をきちんと書面に残していました。

そんな母から教えられた言葉が「啐啄同時（そったくどうじ）」、子どもが求めている時に適切な指導をすることが重要だということです。私も、不登校の子どもと向き合う際には、その機を逃さないよう、他の教師に自分のクラスを支援してもらってでも、子どもに働き掛けました。マネジメントの面でも、母から「目標がなければチャンスは見えない」「展望（ビジョン）がなければ決断できない」ことを教えてもらいました。

本校は、校長・教頭・主幹の3役会議と運営委員会の下に、学力・人間力・体力のそれぞれの課題解決に当たる「チーム制」（縦の組織）と、学年担当全員でその学年の子どもを見取り指導する「学年担任制」（横の組織）のマトリックス組織にしています。情報を常に共有することによって、全教職員の共通理解を深め、教師が個々人だけでなく、学校全体としても力を発揮できるよう、学級・学年・学校経営の一体化を進めています。

校長としての私の役割は、明確な方針を出し、決めたら絶対にぶれないことです。かつて池田先生や母に学び、自分なりに理解し実践してきたように、今の先生方が私の実践から学び、自分なりに考えて実践し、次の世代がまた学び、考えて実践する。そうしたサイクルが続くよう、私は自分の思いを行動で示していきたいと思います。

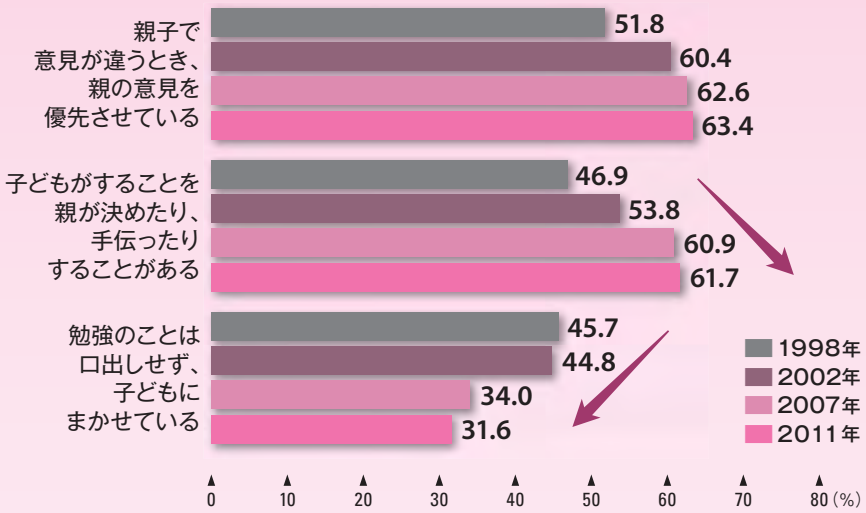
特集

主体的に学ぶ力を育む

―― 学び方の工夫で学習意欲を高める

なかなか自分から行動できず、「指示待ち」の子どもの姿勢が気になるという声をよく聞く。
ベネッセ教育総合研究所の調査では、子どもへの母親の関与が強まっているという傾向も
明らかになっており、これも要因の１つであろう。
しかし、これからの社会を生き抜くために、学力だけではなく、
意欲や主体性が必要であることは言うまでもない。
本特集では、「主体的に学ぶ力」を小学校教育で育むために、
どのような指導の工夫が出来るのかを考えたい。

子どもがすることに母親の関与が強まる一方、勉強への口出しは減少



注1）「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の％
注2）小学３～６年生の母親を対象に調査　注3）全 12 項目中、３項目を抜粋して図示
出典／ベネッセ教育総合研究所「第４回子育て生活基本調査（小中版）」（2012）

深い児童理解に基づき、一人ひとりを温かく励まし自信と有能感を育む支援を

言われたことにはしっかり取り組むが、自分で考えることが苦手という声を学校現場でよく聞く。学ぶことの楽しさを味わい、自ら学ぶ子どもは、どのような指導によって育つのか。教育心理学を専門とする筑波大大学院の外山美樹准教授と、東京都港区立芝浦小学校の黒田泰正校長に、ベネッセ教育総合研究所主任研究員の邵勤風（しょうきんふう）が聞いた。

筑波大大学院人間系准教授
外山美樹
とやま・みき◎筑波大大学院博士課程心理学研究科中退。博士（心理学）。専門は教育心理学。教室環境（友人関係、教師との関係、教室環境など）が子どもの動機づけに及ぼす影響や自己認知について研究。著書に『行動を起こし、持続する力―モチベーションの心理学』（新曜社）、『やさしい発達と学習』（有斐閣）など。

◉主体性とは何か
主体性の土台となるのは豊かな感性や情操

邵　本日は、子どもの主体性を育てる上で大切なことを、理論と実践の両面からうかがいたいと思います。まず、各調査では、以前に比べて家庭学習時間が増加したという結果が出ています。これは、子どもたちが主体的に学ぶようになってきたといえるのでしょうか。

黒田　本校でも、子どもの学習時間が増えていると感じます。「確かな学力」を育てるというねらいの下、きちんとした学力を身に付けさせようという意識が、学校にも保護者にもあるからだと思います。ただ、決められた時間に与えられた課題に取り組み、言われるままに習い事や塾に通うような状況では、主体性は発揮しにくいものです。指示に従い真面目に取り組むのは良いことですが、自分がもっと知りたいと思い、自分で時間をつくって取り組む力はあまり育っていないようです。

外山　子どもが学習に向かう理由はさまざまですが、「教師や保護者に褒められたい」「良い成績を取りたい」という「外発的」な意欲が比較的高まっているのに対し、「分かることは面白い」「新しいことを知りたい」という「内発的」な意欲が低くなっていると感じます。私が普段接する大学生も、課題はしっかりこなす半面、自分でテーマを探すことは苦手な「指示待ち」の傾向が見られます。

邵　そのような子どもの様子の背景には、どのような環境の変化があるとお考えですか。

黒田　少子化により、昔に比べて保護者が子どもを大切にし、手を掛けていることがあると思います。また、最優先すべきは安全ですが、少しの危険や失敗から子どもを遠ざけるために「管理」する傾向がある環境では、子どもは自分の判断で行動したり勉強したりしにくくなっていると思います。

外山　保護者が一生懸命に頑張るあまり、過干渉や過保護になるケースが見られます。受験の影響もあるのでしょうが、いかに学ぶか

主体的に学ぶ力を育む――学び方の工夫で学習意欲を高める

より、いかに良い点数を取るかに目がいく保護者が少なくないようです。

黒田　子どもが焦っていないならば、保護者も焦る必要はないと思います。小学生の頃は、自然の美しさに感動するなど、豊かな感性を育てる時間を十分に取ることもとても重要だと思います。

外山　その点は私も同感です。主体的に学ぶためには意欲が不可欠ですが、それは感情的な要素であり、知育だけではなく感性や情操を養うことから生じます。「どうして紅葉はこんなに美しいのか」と思う感性がなければ、興味や疑問は生まれません。一見遠回りのようですが、感性や情操を養うことは、主体性を育てる上で不可欠だと考えます。

東京都港区立芝浦小学校校長
黒田泰正
くろだ・やすまさ◎東京都の公立小学校教諭、大田区立館山養護学校教頭、大田区立千鳥小学校副校長、大田区立高畑小学校校長を経て、2009年から現職。東京都港区立芝浦小学校◎「児童が学ぶ喜びと、誇りをもてる学校」「保護者・地域の人々と共に歩む学校」を目指し、教育活動の充実を図る。「豊かに表現し、創造できる子供の育成」をテーマに算数科の研究に取り組む。児童数706人。

学校教育目標に「主体性」を掲げる学校が減少

邵　小学校の学校教育目標に含まれる言葉を2002年と10年で比較した結果、「学力向上・学力定着」が大幅に増加する一方で、「自ら学ぶ力・自己学習力」「自立・自主・主体性」は減少しています（図）。小学校では主体性をどう捉えているのでしょうか。

黒田　「総合的な学習の時間」をはじめ、体験重視の教育に取り組んでいますが、一方では「確かな学力」が向上していることを示すために、目に見える学力を高める傾向があるかもしれません。しかし、小学校教育においては、良い点数を取るための努力だけではなく、学習規律や学習方法など学びの基本をしっかり身に付けることで中学校以降の学びにつながると考えています。

◉発達段階から見る主体性

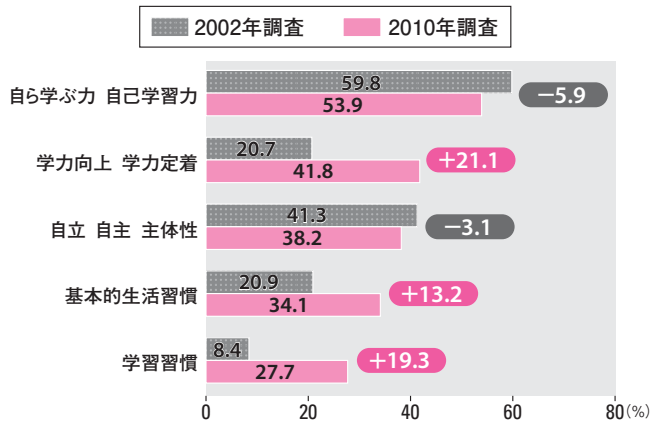
低・中・高学年で異なる主体性を育む支援

邵　主体性を育む方法は、発達段階に応じて異なると思います。どのような点に留意するとよいのでしょうか。

黒田　低学年は、自分が主役で周りから見られたい気持ちが特に強い時期です。認められ

ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室　主任研究員
邵勤風
しょう・きんふう◎初等教育領域を中心に、子ども、保護者、教員対象の意識や実態に関する調査研究を行う。「学習基本調査・国際6都市調査」「第3回子育て生活基本調査」などを担当。

図　学校教育目標に含まれる言葉の経年比較（小学校）



＊複数回答　＊全34項目から抜粋して掲載
出典／ベネッセ教育総合研究所「第5回学習指導基本調査（小学校・中学校版）」（2010）

たり、褒められたり、注目されたりすると意欲が高まりますから、教師は「すごいね」「かっこいいね」など意欲が高まるように声を掛け、帰宅してもそれが持続するようにしています。

外山　幼児期から低学年にかけては、いろいろなことに興味を持つ時期であり、感性や情操をつぶさないことが大切です。そうすることで成長してからも幅広く興味を抱き、自ら取り組む姿勢につながります。

そして、中学年になると、ある程度のことが自分で出来るようになり、自信や有能感が高まります。子ども自身、与えられたことを出来ることは分かってきますから、次の段階として「自分で決めて取り組む」課題を設定するとよいでしょう。日本人は自分で物事を決めるのが苦手という指摘がありますが、小学校段階からそうした経験を徐々に積んでいくことが大切だと思います。

黒田　そうですね。中学年では、知恵や体力が付くことによって芽生えた前向きな気持ちをいかに表に出し、実現させるかが大事だと思います。例えば、体育や図工、ゲームなどで大いに盛り上がり、「次は勉強を頑張ろう」と、めりはりを付ける指導は有効です。また、小学校は社会性を育む場でもありますが、その点で、中学年でのしつけや学び方、心の指導は大きな意味を持つと捉えています。この時期に、学級全体で学習をし、互いに高め合い、褒め合う経験をすると、高学年で豊かな学び合いが生まれます。個々で頑張るだけでなく、集団での学びや友だちの考えも大切にする心を育て、高学年に進ませることが大切だと思います。

外山　高学年では、自ら目標を立てられるようになるので、目標を立てて頑張るように促すとよいでしょう。留意したいのは、高学年になると、自分と他人とを比較したり、周囲の目が気になったりして、理想と現実のギャップに悩み、有能感が低下し始めることです。思春期に差し掛かって劣等感も出てきますが、これは発達段階から見れば当然のことです。「自分だけ、どうして」という思いが強くなるため、「あなただけが悩んでいるのではないよ」と温かく語り掛け、なるべく褒めて自信を付ける支援が大切です。

黒田　高学年になっても、周囲から認められることはうれしいものです。本校では、高学年で自信を付けるために「ミニ先生」になって、知っていることを友だちに教える場を設けるなどしています。

◉主体性を育む指導

プロセスを褒め、大きな目標と近い目標を持たせる

邵　いずれの学年段階でも褒めて認めることが大切だとよく分かりました。褒める際に心掛けたいことを教えてください。

外山　褒めるポイントは必ずしも学習である必要はありません。それぞれの得意なことを認めると、「やれば出来る」という有能感を持ち、それが学習意欲につながります。

黒田　同感です。子ども一人ひとりがどういう良さを持っているか、何が得意か、どのような思いを抱いているかということを、日常の会話や友だち関係の様子などを通し、把握するように努めています。

外山　褒める時、結果だけに着目しないことも重要です。点数ばかりを褒めると、学習目的が良い点数を取ることだけになってしまいます。そうすると、自分が理解することが学習目的だと捉えられず、すぐに答えだけを求めるようになるでしょう。結果を褒めることは外発的な意欲を高めるために有効ですが、それだけにならないように注意してください。

黒田　プロセスを大切にするという価値観がぶれてはいけないと思います。まず努力したことを認め、そこに結果が伴えば、なお良いという考え方を大切にしています。高学年では大勢の前で褒められることが恥ずかしいと思う子どももいますから、時には個々に褒めたり、保護者に褒めるように伝えたりします。

邵　自分で決めた目標に向かって頑張ることが、主体性を伸ばす上では非常に大切だと思います。具体的には、どのような目標を設定させるとよいのでしょうか。

外山　目標は「遂行目標」と「熟達目標」に分類できます。遂行目標は、「テストで良い

主体的に学ぶ力を育む――学び方の工夫で学習意欲を高める

順位を取る」「相手チームに勝利する」といった他者との比較を前提とした目標です。一方、熟達目標は「九九を覚える」「二段跳びが出来るようになる」など、具体的な行動や技能の向上を目標とします。遂行目標はどれだけ頑張っても相手が上回っていれば達成できませんが、熟達目標は自分の努力次第で達成できるため、取るべき行動が明確で、意欲が低下しづらいという特性があります。先を見通せるようになる高学年では、大きな目標と近い目標を持たせることも効果的です。将来を見つめ、そのために今の自分に出来ることを考えるようにするとよいでしょう。

黒田　大きな目標と近い目標は、授業でも意識しています。長い単元では最初に全体の見通しを持ち、目標に向かって1時間ずつ歩んでいくという意識で学ぶようにしています。

主体性を育むためには、一見遠回りでも豊かな感性を養うこと、そして、面白い授業を工夫していくことが大切だという意見が交わされた

社会の中で自立して自分らしい人生を歩む土台に

邵　自信を育むためには、一人ひとりの違いへの対応も必要だと思います。その点で気を付けたいことをお聞かせください。

黒田　指導案では「正解」「間違い」「問題が理解できない」の3段階に分け、それぞれの手立てを用意しています。授業では座席表を用いて一人ひとりの理解度を把握し、分からない子どもが多ければ小グループの指導を取り入れたり、自力解決が出来ない子どもにヒントカードを提示したりします。学習意欲が低い子どもには、実物を見せるなどして興味を持たせたり、「ここからなら自分で出来る」というところまで教師が一緒に進めたりします。大切にしているのは、どのレベルであっても、最終的な答えを子ども自身に見付けさせることです。「何とか自分で答えを見付けるんだ」という強い思いがなければ、学習にならないからです。報われない努力を減らすために、学習方法を教えることも重視しています。もう少しで自力で解決できそうな子どもには、質問をされるまでヒントを出さないなど、学級内で支援の仕方を変えています。

外山　高学年になると抽象的な思考が出来るようになります。しかし、個人差が大きいため、子ども一人ひとりがどの段階にいるのかを見極め、状況によっては具体的なものを見せるなどの支援を行う必要があるでしょう。

邵　最後に、小学校で主体性の育成に力を入れることが、その後の成長にどう結び付くとお考えでしょうか。

黒田　子どもが成人した時に自立する土台になるという思いで取り組んでいます。社会に出るということは、守られてきた環境から出ることであり、そこには競争があり、醜いものや苦しいこともあります。そういう世界で生きていくためには、主体的に物事に取り組む力が必要です。主体性は、生きがいや感謝の心があってはじめて成立するものだと思います。「人皆我が師」の思いを持ち、周囲の人のおかげで自分が学べるという感謝の心を持ち、コミュニケーションを膨らませてほしい。そして、いざとなったら孤独にも耐えられる強さも持ってほしい。そのような感謝の心と強さがあれば、例え悪い誘いがあっても、自分の道を外さずに生き抜けると思います。

外山　自分らしい人生を歩むために、主体性は不可欠でしょう。自分らしい人生とは子どもによって異なります。テストで良い点数を取るためだけの学力ではなく、自分らしい人生は何かと自分で考え、自分で決める力の支えになるのが主体性だと考えています。

邵　本日はありがとうございました。

9年間を見通した一貫した指導で生活を安定させ、学習意欲を高める

秋田県 湯沢市立湯沢東小学校

2011年に3校が統合して新たなスタートを切った湯沢市立湯沢東小学校。統合した当初は、新しい人間関係の中で子どもたちが自分を出せない姿が見られた。小・中学校が合同で授業改善に取り組む一方で、自学を促す家庭学習の指導などに力を入れ、意欲的に学ぶ子どもを育んでいる。

取り組みのねらい

- 3校が統合して3年目であることに配慮し、子どもが同じ方向を向き、安心して学べる環境をつくる
- 主体的に学ぶ意欲や挑戦する気持ちを育てる

取り組みの内容

- 小中一体型校舎であることを活用し、小中の教師が協議し、9年間を見通した「生活習慣」「学習習慣」「家庭学習の手引き」といった規律を作成
- 小中合同で「学びのスタンダード」を設け、授業改善を目的とした研究に取り組む
- 「自学ノート」を中心とした家庭学習の指導を行う

取り組みの成果

- 子どもたちが落ち着いて授業に臨むようになった
- 家庭学習に積極的に取り組むようになった
- 中1ギャップがほとんど見られなくなった

School Data

◎2011（平成23）年、湯沢東小学校、湯沢北小学校、岩崎小学校が統合し開校。小中一体型校舎という特色を生かし、授業や行事、避難訓練など、さまざまな教育活動を連携して行っている。

校長	姉崎克則先生
児童数	514人
学級数	20学級（うち特別支援学級4）
所在地	〒012-0803 秋田県湯沢市杉沢新所字八斗場33
TEL	0183-72-5125
URL	http://www.yutopia.or.jp/~higa-es/
公開研究会	未定

◉取り組みのねらい

学校の統合を機に小中連携で教育活動の充実を図る

湯沢市立湯沢東小学校は、2011年、湯沢東小学校、湯沢北小学校、岩崎小学校の3校が統合して開校した。開校に当たって湯沢市立湯沢北中学校との一体型校舎を建設し、小中連携もスタートさせた。姉崎克則校長は学校づくりの方針を次のように語る。

「全ての子どもが安全に過ごし、安心して学べる居場所があること、そしてしっかりした学力の保障を原則として、保護者や地域から信頼される学校を目指しています」

主体的に学ぶ力を育む――学び方の工夫で学習意欲を高める

学校周辺には田畑が広がり、穏やかな風景が続いている。3世代が一緒に暮らす家庭が多く、子どもたちは大勢の大人に温かく見守られながら成長している。

「湯沢市のある県南地域の人々は穏やかな気質だといわれますが、子どもも素直で純朴です。生活習慣は整っており、先生方は学習指導に集中できています」（姉崎校長）

学習面の課題は、言われたことには熱心に取り組むが、他の子どもの発言を待ってから自分の考えを出すなど、やや消極的だったことが挙げられる。

◉取り組みの内容

9年間を通した学習規律が学習姿勢の安定感を生む

3校から集まった子どもたちが同じように学べる環境をつくるために、最も重視したのが学習や生活に関する規律の共有だ。湯沢市が小中連携に力を入れていることや、小中一体型校舎となったことから、規律は湯沢北中学校と協議して9年間を見通して作成した。

学びのベースとなる「東っ子の学習ルール」は、湯沢北中学校での学習の規律を、小学生の発達段階に合わせてアレンジしたものだ。「身の回りを整理整頓しよう」「タイム着席をしよう」「語尾まで話そう」「ていねいに字をかこう」など7カ条から成る。

この他、あいさつや礼儀、テレビやインターネットなどへの接し方など、生活習慣の指針、授業の準備や受け方の基本ルール、また家庭学習の手引きも作成した。これらは、小学1年生から中学3年生まで、学年を追ってステップアップしていく形式とし、一貫した指導が出来るようにしている。

このようにして学習や生活に関する規律を明確に打ち出したことで、学校運営に統一感が生まれているという。

「教職員全員で指導方針を共有し、指導の足並みをそろえているため、子どもは進級して担任が変わっても戸惑わずに学習に取り組んでいます。こうしたルールが基盤となり、積極的な学びの姿勢につながっていると考えています」（姉崎校長）

写真　6年生の国語の授業では、新聞記事を読み、見出しをグループで考えた。全ての学年や教科で学び合いを重視しているため、子どもたちは話し合いに慣れており、積極的な姿勢で議論が出来ていた

湯沢市立湯沢東小学校校長
姉崎克則 あねざき・かつのり
「先生方一人ひとりの力を最大限に引き出し、そして全員の力を結集し、学校教育の力にしたい」

湯沢市立湯沢東小学校
中川玲子 なかがわ・れいこ
教務主任。「『ピンチはチャンス』と考えて学校を変えていきたい」

湯沢市立湯沢北中学校校長
半田 忠 はんだ・ただし
「夢と希望に向かって、『チャレンジ、チャンス、チェンジ、チームワーク』の4つの『チ』を大事にしたい」

湯沢市立湯沢北中学校
丹 俊章 たん・としあき
研究主任。「チームワークを大切に、小中の教師間はもちろん、子どもや保護者とのつながりも大切にしたい」

共通の授業フォーマットで小中の授業の展開を統一

子どもが積極的に意見を言えないことが課題として挙げられていたが、特に開校当初は、互いへの遠慮などから、なかなか自分を出せない姿が目立った。そのため、主体的に学ぶ意欲や挑戦する気持ちを育成する必要があると考え、12年度から小中合同で、「『考える力』を育てる指導の在り方～『比べる・つなげる・書く』をキーワードとした授業改善～」をテーマに研究に取り組んでいる。

研究は、小中合同の教科部会を中心に、小中共通のキーワードを設けて授業づくりについての議論をしながら進めている。12年度は、自分の考えをしっかり持てる場を設定することで、自信を持って伝えられ、更に友だちの考えと「比べる」ことなどによって自分の考えを深めていくという観点で研究を行った。13年度のキーワードは「つなげる」だ。話し合い活動に加え、「既習の内容と授業で得た知識をつなげる」「友だちと考えをつなげる」「体験と知識をつなげる」などの指導を重視している。そして、14年度は「書く」をキーワードにして、書くことを通して考えを深める学習を研究する予定だ。湯沢北中学校研究主任の丹俊章先生は、「小中の教師が視点を共有することで、学校種を超えて有効な議論が出来ています」と説明する。

研究の成果の1つが、問題解決の過程を明示した「学びのスタンダード」(図)だ。小学1年生から中学3年生まで共通フォーマットを用いて授業を構成していることがポイントだ。

「学年や教科によって応用しますが、『これだけは！ 実践事項』という3つのポイントは、全ての授業に盛り込むように努力しています。授業展開を統一することで、子どもが見通しを持って学ぶ姿が見られるようになりました」(姉崎校長)

子どもたちは次第に考えを共同で深められるようになっている。6年生の国語の授業で行われた、新聞記事を読んで見出しを考える活動では、グループごとに最も大切な段落は何かを話し合ってから見出しを検討した。どの子どもも話し合いに積極的に参加し、相手の意見をしっかり聞いた上で自分の考えを述べ、考えを深めていく姿が見られた。その後のグループ代表の発表でも、皆が発表者を見つめてうなずきながら耳を傾けるなど、聞く姿勢がしっかり出来ていた。

繰り返し評価されることで学ぶことの楽しさに気付く

同校で塾に通う子どもはほとんどおらず、学校外学習は家庭での宿題と自主学習が中心だ。家庭学習も小中接続を意識して指導する。

家庭学習の基本方針は、宿題は毎日必ず出

図　「学びのスタンダード」(抜粋)

過程		学習活動と児童生徒の姿	指導のポイント
導入	❶ つかむ	◎課題の意識化 ➡学習課題・学習のめあて(本時のゴール)をつかむ(何が、どのくらいできるようになればよいのかが分かる) ➡既習事項と「どこが」「どのように」違うのか気付く	●前時の想起 ●既習事項との比較 ●動機付け・意欲付け ●学習課題・学習のめあての明示 ●「先生の課題」から「児童生徒の課題」へ
展開	個の力を高める ❷ 読む 見通す	◎課題解決に必要な情報の取り出し ➡文章・グラフ・データ・図表・記号・心情等の多様な情報を読み取る ➡予測する。解決の方法、見通しをもつ(「何を」「どう」考えていくのかが分かる)	●資料モデルの提示 ●資料の読解を学ぶ ●情報の共有・比較
	❸ 考える	◎一人でじっくり考える場の設定 ➡一人で考え、自分の考えをもつ(自分の考えを書く等) ➡既習事項を生かして考えていこうとする。(考えの根拠をもつ)	●考える視点の明示 ●考える時間の設定 ●考えをもたせる手立ての工夫 ●ペア・小グループでの活動 ●ヒントコーナー等 ●既習事項を振り返る環境整備
	共同で深める ❹ 深める	◎考えを「伝え」「くらべ」「深める」 ➡自分の考えと比べながら友だちの考えを聞く。質問する(「どこが」「どのように」同じか違うか) ➡友だちの意見と比べながら、自分の意見を伝える ➡友だちの考えのよさに気付く ➡自分の考えを見直し、修正する	●話し合いの視点の明確化 ●話し合いの視点に沿う発言 ●発言は「頭括型」 ●考えの類型化 ●意見を吟味する視点の焦点化
終末	❺ まとめる 生かす	◎学習の振り返りと変容の自覚 ➡学習課題・学習のめあてに沿って、自分の言葉で振り返る ➡自分の達成度・理解度を判断する ➡学んだことを生かしたり、もっと学習したいことや新たな疑問を見つけたりする	●振り返り ●キーワードの提示 ●応用問題等の実施 ●次時への意欲付け
家庭学習		◎授業で学んだことを生かして次の時間までにするべきことの確認(復習の場合も、予習の場合もある)	

小・中共通 これだけは! 実践事項

Point❶ 学習課題・学習のめあての明示
- 赤のチョークで、課題・めあてを囲むか、アンダーラインを引いて示す

Point❷ つなぐ=交流
- 自分の考えと友だちの考えをつなぐ(個々の思いを交流する)
- 友だちと一緒に体験する
- 既習事項を生かす、結びつける
- 友だちの考えのよさに気付く
- 自分の考えを加除修正する　など

Point❸ まとめる　生かす
- 青のチョークで、まとめの部分を囲むか、アンダーラインを引いて示す
- 「学習課題・学習のめあて」に沿って、自分の言葉で振り返る
- 1時間の学びを振り返ることのできるノートを工夫する

湯沢東小学校と湯沢北中学校は、「小・中連携通信」を定期的に発行し、小中連携の研究成果を両校全体に発信している。上記の「学びのスタンダード」もこの通信で発信し、各教師が実践している

＊同校の資料から抜粋して編集部で作成

主体的に学ぶ力を育む――学び方の工夫で学習意欲を高める

し、2年生以上には「自学ノート」の提出も課す。学習時間の目安は、両方を合わせて「学年×10分」だ。自学ノートは、子どもが自由にテーマを決めて学習する。ただし、2年生は導入期間として担任がテーマを出し、具体的な内容は各自が考えて取り組む。そして、3年生以降は、教科も内容も自分で考えて取り組む。学習内容は、子どもによって大きく異なると、教務主任の中川玲子先生は言う。

「学習に苦手意識がある子どもは、漢字や計算などの反復練習にまず取り組むことが多いです。子どもの様子やノートの内容を見取り、学習を発展させた方がよいと思ったら、『その漢字を使う文章を書いてみたら』など声を掛けています」

更に、6年生には中学校での学習を意識させるため、湯沢北中学校が定期考査の時にはその前の1～2週間がテスト期間になると伝えたところ、その期間に自学ノートを頑張る子どもが増えた。また、テスト後に間違えた箇所を見直して復習するように促している。

自学ノートは、子どもと教師の連絡帳の意味合いもある。担任は毎日一人ひとりの自学ノートにコメントを書き、学習内容を褒めたり、励ましたりし、時には、学校生活で気になったことをフォローしている。

「良いところを評価する指導を続けるうちに、子どもは学ぶこと自体を楽しんでいる様子がうかがえます。クラス全員分のコメントを書くのは時間が掛かり、負担に感じることもありますが、子どもの成長が見られるのは、それ以上の喜びがあります」（中川先生）

更に、小中連携の一環として、6年生には予習をするように指導している。

「中学校での学習にスムーズに移行できるように、次の授業の教科書を読むように指導するなど、徐々に予習の方法を教えています。予習をすると授業が分かりやすいという体験を積むと、子どもは自然と予習の必要性を感じるようです」（中川先生）

湯沢北中学校では、いわゆる中1ギャップに悩む生徒がほとんど見られないという。これは、学習や生活の面で9年間を通した指導をしていることの結果と、両校は捉えている。

◉取り組みの成果

成人式を迎える時に「自立」できるよう長い目で捉える

今後も、小中連携による教育活動を充実させ、先を見通して目標を持って学ぶ子どもを育てたいと考えている。すぐには「成果」を求めず、子どもの成長を長い目で見た指導を続ける考えだ。湯沢北中学校の半田忠校長は展望をこう述べる。

「自立して自分の足で歩める『大人』になって、初めて私たちの教育の成果が表れたと言えると思います。子どもたちが成人式を迎える日が今から楽しみです」

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教職員に学校づくりの方向性を明確に示すことを何より大切にしています。研究や研修の内容について細かく指示するのではなく、「こういう子どもを育てよう」といった理念を話し、働き掛けています。

学校を高めていくためには、教職員が同じ気持ちで同じ方向に進む必要があります。例えば、本校の教職員を「チームイースト（東校）」と呼んで仲間意識を高め、チームワークを強くするように努めています。

校長　**姉崎克則**先生

ミドルリーダーの役割

校長先生が示した方向性を具現化するために、どのように進めていくか、具体的なステップを考えることが私の役割です。「それは難しい」という声が上がったとしても、すぐに諦めず、どうすれば可能になるかを模索するように心掛けています。

1人で考えるには限界がありますが、先生方と話し合う中で良案も生まれてきます。小中の区別なく、チームの力を生かして進めていくように心掛けています。

教務主任　**中川玲子**先生

ICTの活用で思考や表現を促し、成功体験を積み上げて意欲を育む

東京都 世田谷区立砧南小学校

世田谷区立砧南小学校の6学年の菊地秀文先生のクラスでは、ICTを活用した授業により、意欲的に考え、表現する力の育成を目指している。「多様な表現が出来る」「子ども同士の考えをつなげやすい」など、ICTのさまざまな特性を生かした授業で、子どもの主体性に良い変化が表れつつある。

取り組みのねらい

- 学習に対する自信を持たせる
- 間違いを認め合い、自分の考えを率直に表現できるクラスをつくる

取り組みの内容

- タブレット端末の特性を生かして、子どもたちの表現の幅を、紙以外の環境にも広げる
- 子ども同士の考えをつないで協同学習を活性化し、その中で「自分の考えがグループやクラス全体に貢献している」という自己有用感、「みんなで頑張っている」という充実感を味わわせる
- 協同学習の成果物を一人ひとりのものとし、達成感を抱かせる

取り組みの成果

- 一人ひとりの考えが深まり、子ども同士の学び合いが活発になった
- 特に、紙の教材だけの環境では学力が低迷していた子どもの学習意欲が高まった

◉取り組みのねらい

学習に対する自信を付けて考えを率直に表現できるようにする

世田谷区立砧南小学校が位置する地域は、都心部でありながら農地が残るなど緑に囲まれた環境で、昔から住む人たちも多い。近年は宅地開発が進んでいることもあり、児童数は年々増加し、現在は約900人が通う。

子どもたちは全体的に活発で、学習意欲は高い。半面、自分の思いをなかなか表現できない傾向が見られることが課題だ。久末節子校長はこのように語る。

「自分に自信がなく、間違えたり、人と違っ

School Data

◎1961（昭和36）年開校。多摩川などの自然環境に恵まれた地域にある。「郷土愛をもつ子どもの育成」を重点目標の1つとして、地域と連携した活動に力を入れている。

校長　久末節子先生
児童数 897人　学級数 26学級
所在地 〒157-0077　東京都世田谷区鎌田4-3-1
TEL　03-3417-2378
URL　http://www.setagaya.ed.jp/kina/
公開研究会　未定

主体的に学ぶ力を育む――学び方の工夫で学習意欲を高める

たりすることを恐れているように見えます。家庭で自分の気持ちを伝える機会が減り、語いも増えず、うまく表現できないのかもしれません。児童数が多く、多様な考えを交流できる本校の良さを生かすためにも、人の話をよく聞き、自分の考えを話したり書いたりする力を伸ばす指導を大切にしています」

「自分の考えを伝えたい」といった積極性の土台となる主体性は、教師が学びの条件を整えることで育まれると考えている。

「主体性は待っていれば育つものではありません。子どもが主体的に学んでいるように見える授業の裏には、教師の入念な準備や仕掛けがあるはずです。また、それが教師の役割ではないでしょうか」（久末校長）

ＩＣＴ活用リーダーで６学年担任の菊地秀文先生のクラスでも、基礎学力は付いているが、考え、表現する力に課題が見られた。

「学習に自信がない子どもは、自分の意見を表に出すことをためらいます。そこで、普段から『教室は間違える場所だ』『間違いは宝物だ』と伝え、授業では子どもの間違いを出発点にして学ぶことで、自分の意見を率直に表現できるクラスを目指しています」

◉取り組みの内容

タブレット端末を活用して協同学習の成果物を自分のものに

子どもが考えを深め、活発に表現し合うようになる方法の１つとして、菊地先生はＩＣＴを活用した授業づくりを進めている。この実践は、教育テストの研究開発などを行うＮＰＯ法人ＣＲＥＴ（教育テスト研究センター）からの委託研究であり、現在は菊地先生のクラスのみで取り組んでいる。

菊地先生のクラスには１人１台のタブレット端末やデジタルペンが配布され、デジタル教科書や学習ソフトなどのデジタル教材を使いながら、日々の授業を行っている。菊地先生は、ＩＣＴの特性を生かしてどのような授業を展開し、その中で子どもの主体性はどのように育まれているのか。「第二次世界大戦時の子どもの生活の様子を資料から考える」という社会科の授業で見てみよう。

授業では、本時の課題を確認し、デジタル教科書の該当部分を音読した後、当時のニュース映像を視聴した。続いて、個別学習の時間が設けられ、子どもは教科書の資料を見ながら、「子どもはどんな暮らしをしていたか」は緑、「子どもはどんな気持ちだったか」は黄、そして「自分が考えたり感じたりしたこと」はピンクというように、タブレット端末上の色分けされた枠内に入力した。これを付せんに見立てて、次の協同学習で活用する。この時、デジタル教科書と紙の教科書のどちらを読むか、付せんにどのような方法で入力するのかは、子どもに任せている。

「全てをＩＣＴ化し、皆が同じ方法で学習をすることがよいとは考えていません。自分が使いやすいメディアを選択することも、学習の１つと捉えています」（菊地先生）

続いて、４人１グループに分かれて、協同学習が行われた。タブレット端末の付せんを管理するソフトには、無線通信によってグループ内で付せんを交換し合える機能がある。自分のタブレット端末の画面上の付せんを、友だちのタブレット端末に向けてフリック（指で触れて軽く払うこと）すると、相手の画面に付せんが移動する仕組みだ（**P.14 写真**）。こうして付せんを交換し合い、色別に担当を分け、同じ内容や違う内容に分類した。個々で整理し終わったら、その情報をグループ全員で共有。そして、友だちの考えを受けて、気付いたり考えたりしたことを書き加え、全体学習の時間に意見交換を行った。

このように、協同学習ではタブレット端末を活用し、子ども同士の考えをつなぐことに重点を置いている。

世田谷区立砧南小学校校長
久末節子 ひさすえ・せつこ
「子どもに近いところにいる校長でいるために、毎日全校児童の顔を見るように心掛けている」

世田谷区立砧南小学校
菊地秀文 きくち・ひでふみ
ＩＣＴ活用リーダー。６学年担任。「子どもがハッピーだと思える学校になるための環境を追求していきたい」

写真　協同学習の様子。タブレット端末上で、自分が入力した付せんを交換し合って考えを共有する。グループ全員の考えを色別に見ることも出来る

「考えを表現するのが苦手という子どもは、他の子どもの付せんを見ることで刺激を受け、自分の考えを出せるようになります。考えを表現できる子どもは、他の子どもの意見と比較することで、より深く考えられるようになります」（菊地先生）

デジタルの付せんと紙の付せんとの違いは、考えがスムーズに共有されることに加え、最後に全員の付せんを自分のタブレット端末に所有できることだ。

「みんなが入力した付せんを見ると、さまざまな考え方があることに気付き、自分の考えが広がっていきます。更に、グループ内で考えをまとめる際には、自分の考えが全体に貢献していることが視覚的に分かるので、『次も頑張ろう』という意欲が生まれます。従来は誰のものにすればよいのか分からなかった協同学習の成果物が、自分のデータとしてタブレット端末に蓄積されていくことも、達成感につながっています」（菊地先生）

書くことにとらわれずに思考に集中できる

菊地先生は、タブレット端末を授業に活用し始めてから、子どもの学習意欲が明らかに高まったと感じている。実際、個別学習では、遊んでいるような子どもはおらず、全員が資料を見ながら熱心に書き込んでいた。タブレット端末は、個々の学習意欲にどのような影響を及ぼしているのか。

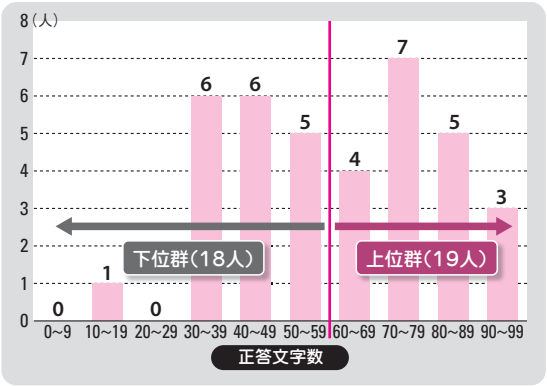
紙環境による視写能力測定テストを実施したところ、視写能力には差が見られ（図）、学力との相関があった。視写が苦手な子どもは、授業中、教科書とノート、黒板の間で視線を動かすことや、消しゴムで消す煩わしさなどにとらわれ、集中が途切れて思考が分断してしまうためだと菊地先生は分析する。

「タブレット端末やパソコンならば、きれいな文字が簡単に入力できる上に、その文字を瞬時に消したり元通りにしたりできるので、思考に集中しやすくなります。視写能力が低くても、ICTへの親和性が高い子どもは、タブレット端末を用いて自分の考えをたくさん表現しています。『どう書けばよいのか分かった』『書く楽しさが分かった』という声が聞かれます」（菊地先生）

書くことが苦手な子どもも、タブレット端末の動画・画像の編集機能を使って、豊かな表現をする姿が見られるという。

図　視写能力測定テストの結果

◎紙環境による記入正答文字数　平均 60.41 文字（37人）



紙に書かれた文字を２分間で書き写すテスト。視写能力の上位群は学力も高いという　＊菊地先生からの提供資料を基に編集部で作成

「成功体験」の蓄積が主体性につながる

更に、菊地先生はICTの特性を生かし、次のような場面でも子どもの学習を深めている。

理科の実験では、タブレット端末で実験の様子を録画し、それを見ながら考察する。

「今までは実験中のメモや記憶が頼りだったので、考察があいまいになりがちでした。しかし、動画を見れば、実験中に気付いたり考えたりしたことを思い出せるので、考えを

主体的に学ぶ力を育む――学び方の工夫で学習意欲を高める

発展させることが出来ます」（菊地先生）

算数の解法を説明する場面では、デジタルペンのストローク（筆跡）を記録する機能を使うこともある。解法例として、ある子どものストロークを電子黒板に再現し、どのように考えながら解いていったのかをたどる。子ども同士で考えを共有できるだけでなく、取り上げられた子どもの自己肯定感を高め、他の子どもの学習意欲を刺激するという。

「電子黒板に子どもの考えが書かれた画面を映したり、全員分の画面を一覧表示したりすることは、考えの共有に加えて、みんなで頑張っているという意識も生み出しています。他の子どもの学習状況が見えることは、とても刺激になるようです」（菊地先生）

このようにＩＣＴのさまざまな特性を生かした授業によって、従来の学習法では力を発揮しにくかった子どもが成功体験を積むことができ、「もっと考えたい」「人に伝えたい」という意欲が生まれ、主体性が育っていくと、菊地先生は考えている。

「ＩＣＴの活用により、特に紙だけの環境では学力が低迷していた子どもたちを伸ばす可能性があると、強く感じています」

◉取り組みの成果

子どもが自分の特性に応じて学習法を選べるようにしたい

菊地先生が今後の課題に挙げるのは、紙とＩＣＴの共生や住み分けだ。例えば、学力上位層の子どもの中には、タブレット端末では紙ほどのパフォーマンスを発揮できない場合が見られたという。

「そうした子どもも、次第にＩＣＴに順応していくと思われますが、相対的に紙環境よりもパフォーマンスが高まるかどうかは個人差があると考えています。紙とＩＣＴでは、操作方法だけではなく、思考過程が異なるからです。紙は順序立てて考える要素が大きいのですが、ＩＣＴは取りあえず思い付いたことを入力し、それらを編集するような思考が求められると考えています。教師が紙とＩＣＴの特性を理解した上で、子どもが学習法を自由に選択できる環境を整えると共に、子どもが自分の能力を発揮しやすい学習法を選べるように、指導することが必要だと考えています」（菊地先生）

菊地先生の実践は、現在はＣＲＥＴからの研究委託による限定的な取り組みだが、これからの教育を考える上で大きなヒントを示していると、久末校長は語る。

「ＩＣＴは、主体性を持つきっかけとなる興味・関心を抱かせたり、子どもたちの考えをつないで交流を促したりと、大きな可能性を秘めたツールだと実感しています。遠からず小学校の授業でも当たり前に活用されていくものと捉え、この研究の成果を今後の教育活動に生かしたいと考えています」

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

先生方が学ぶ場をつくることを心掛けており、校内研修を充実させたり、校外研修への参加を促したりしています。世田谷区では小中連携に取り組んでおり、その中で各学年にふさわしい力を付けていくためには、先生自身が学び続ける必要があると考えているからです。

先生方には学んだことを自分の力としてもらうと共に、それらを学校に戻して、他の先生方の成長にもつなげてほしいと思っています。

校長　**久末節子**先生

ミドルリーダーの役割

ＩＣＴは実際に見ないと分かりにくいことがあるため、私が活用しているところを見てもらい、どのような意図や思いがあるかを詳しく伝えています。更に、その実践に対する意見を語り合うようにしています。また、他の先生の授業を見た時には、自分の思いを語ってもらう中で、自分の良さや課題に気付けるようなやりとりを心掛けています。特に若手の先生に対しては、努力や発想、思いを十分に認めて褒めることを大切にしています。

ICT 活用リーダー　**菊地秀文**先生

予習を起点にした学び方指導で主体的な学習サイクルを生み出す

岡山県 倉敷市立柏島（かしわじま）小学校

倉敷市立柏島小学校は、主体的な学習サイクルを生み出そうと、予習を起点とした「学び方」の指導に重点を置く。予習によって自分なりのめあてや見通しを持って授業に参加し、さまざまな学び方を活用して課題を解決する経験を積み重ねることで、自ら課題に取り組む意識や姿勢が育っている。

取り組みのねらい

- 全ての子どもに基礎・基本を定着させる
- 自分にとってハードルが高い課題にも、主体的に取り組む意欲を育てる
- 家庭や地域と連携して教育の充実を図る

取り組みの内容

- 予習を起点としてめあてや見通しを持つことによって、意欲的に取り組める授業づくりをする
- 学習方略（学び方）を教え、授業や自主学習で活用させる

取り組みの成果

- 基礎・基本が定着するようになった
- 「出来た」「分かった」という成功体験を積み重ねることで、自信と共に主体性が育ってきた
- 予習をはじめとして、子どもに主体的な学習サイクルが定着しつつある

School Data

◎1873（明治6）年開校の松柏小学校に起源を持つ。2010年「岡山県学力・人間力育成推進会議モデル地域研究指定校」、11年、倉敷市教育委員会「学校力向上」研究指定校として研究を推進。

校長	三宅孝幸先生
児童数	334人
学級数	15学級（うち特別支援学級３）
所在地	〒713-8123　岡山県倉敷市玉島柏島2751-1
TEL	086-522-3076
URL	http://www.kurashiki-oky.ed.jp/school/kashiwajima-e/
公開研究会	未定

◉取り組みのねらい

「全国学力・学習状況調査」等で見えてきた4つの課題

倉敷市立柏島（かしわじま）小学校は、工業地帯のベッドタウンとして発展した地域に位置し、落ち着いた雰囲気の住宅街にある学校だ。子どもたちは素直で活動的で、学習に対して前向きに取り組む姿が見られる。一方で、文部科学省「全国学力・学習状況調査」等の結果から次のような課題が明らかになった。①算数の学力差が大きく、基礎・基本が十分に身に付いていない子どもがいる、②困難さを感じる課題に対して主体的に課題解決をする意欲が低

主体的に学ぶ力を育む――学び方の工夫で学習意欲を高める

い、③家庭学習習慣や学習スキルの定着の個人差が大きい、④家庭や地域の教育力が低下傾向にある。三宅孝幸校長はこのように語る。

「子どもたちには、社会の役に立つ喜びを感じながら、幸せな人生を送ってほしいと願っています。その素地として、小学校段階では、基礎・基本としての学力、自分で課題を見付けて解決する力、協調性などを備えた人間力を育てることを大切にしています」

それらの育成に学校が出来ることとして、「学力」と「体験」を重視する。

「学力は、自分がやりたいことに取り組むための土台となるものですから、しっかり付けたいと思います。そして、多様な体験の場を与え、失敗した理由を考えてやり直したり、皆で一緒にやり遂げる充実感や高揚感に包まれたりする中で、人間的な成長を促していきたいと考えています」（三宅校長）

◉取り組みの内容

その日の学習事項を教えてから十分に考えさせる授業に

そのような課題意識を持つ同校は、「家庭・学校・地域が協働して『人間力』をはぐくむ学校の創造」を研究主題として、「教えて考えさせる授業」に2010年度から取り組んでいる。

「教えて考えさせる授業」とはどのようなものか。基本的な授業展開は、「予習」「教師の説明」「理解確認」「理解深化」「自己評価」の5段階となる（図1）。

◎予習　授業内容に見通しを持ち、めあてが意識されて、主体的に授業に取り組めるとの考えから、家庭での予習を指導している。予習の目標は、低学年は教科書を読んで分かった部分に下線を引く、中学年は分からないことをノートに書く、高学年はこれらに加えて、自分のめあてを書くこと。

◎教師の説明　授業では、その時間に初めて学ぶ「基礎的学習事項」を、教科書の基本問題を通して、教師が説明する。教師の一方的な説明ではなく、子どもとのやり取りを重視し、具体物を提示するなど、クラス全員が理解できるように丁寧に、かつ具体的な説明を心掛ける。

◎理解確認　教師の説明を子どもが理解できたのかを確かめるため、子どもは同レベルの問題を解き、ペアで説明し合う。

◎理解深化　理解を深めるため、やや難しい問題にグループで取り組む。

◎自己評価　「分かったこと（何をきっかけにどう分かったのか）」「間違えたこと」「よく分からなかったこと」を振り返る。

従来の授業と異なるのは、それまで授業を通して考えさせていた内容を、「大切なこと」として最初に教えてしまう点だ。当初は、この方法に戸惑いを覚える教師もいた。

「多くの教師は、クラスみんなで教科書を読み、問題に取り組みながら、本時の課題を理解していく過程を重視していました。それを、冒頭に教えたい内容を全て説明してしまう授業にすることは、大きな転換でした。し

図1　基本的な授業展開

教える	（家庭で）予習 めあて	**めあて意識（予習段階のメタ認知）** 「問題は解けたけど、どう説明したらいいのかな」 「～が難しかったので、…できるようになりたい」
教える	教師の説明 大切	**本時に必要な方略・考え方** 「こうやったらできるんだな」 「こう考えたらいいんだな」
考えさせる	理解確認 たしかめ	**「説明」と同程度の問題が理解できるかどうか** ＝説明できるかどうか
考えさせる	理解深化 チャレンジ	**少し難易度の高い、発展的・活用的な問題** ＝説明できるかどうか
考えさせる	自己評価 今日の学習で	**予習時を振り返る（メタ認知）** 分かるようになったこと、できるようになったこと ・何をきっかけにどう分かったのか（変容と方略） 間違えたこと、よく分からなかったこと（自分へのアドバイス）（方略）
家庭での授業の再構成		

＊同校の資料を基に編集部で作成

倉敷市立柏島小学校校長
三宅孝幸 みやけ・たかゆき
「学校が安全で楽しい場であることは大前提。さまざまな出会いや気付きなど、初めての体験をたくさんさせたい」

倉敷市立柏島小学校
小早川祐子 こばやかわ・ゆうこ
研究主任。「学校と勉強が大好きな子どもでいてほしい。そのために子どもと一緒に楽しめる授業づくりをする」

かし、実践を進めるうちに、この展開は子どもたちに基礎・基本が定着しやすいと感じるようになりました。更に、何を教えて何を考えさせるかを焦点化する必要はありますが、課題解決型の授業と共通点が多いことにも気付き、そうした認識が教師間に広まるにつれ、この授業形態が定着していきました」（三宅校長）

「教師の説明」では、限られた時間に「何を教え、考えさせるか」を焦点化することがポイントになる。以前にも増して、教材研究や子どもの実態把握に力を入れるようになった。また、学校全体で取り組んでいるので、学年や担任が変わっても、授業の進め方や学習法に変化がなく、子どもが安心して学習に取り組めるのも利点だという。

予習は1年生の後半から行う。初めは1人で家庭で学習するのは難しいため、授業の最初にクラス全員で予習に相当する活動を行い、慣れてきたら家庭で取り組ませている。研究主任の小早川祐子先生はこう説明する。

「予習によって、自分が分からないことが明確になれば、『授業で分かりたい』と思うようになります。高学年になると『問題は解けたけど、式の意味が分からない』など、授業を受ける目的がより焦点化されます。クラス全員がそのような状態であれば、最初の課題共有がスムーズに進み、その後の説明や理解深化の時間を多く確保できるのです」

授業や自主学習に生かせる「学び方5（ファイブ）」の指導

「教えて考えさせる授業」の導入初年度は、学力面の成果があまり見られなかった。その要因として、子どもが「何をどう学ぶか」という学習方略（学び方）を分かっていないことが考えられた。そこで、子どもに知ってほしい学習方略を低学年用、中・高学年用にまとめ、「学び方5（ファイブ）」と名付けて全校に広めた（**図2**）。例えば、低学年版の「なろう、ミニせんせい」は学習内容を友だちに説明することで、「かこう　ずやえ」は図や絵をかくことで、理解が深まることを教えている。授業では、「間違えたのはなぜかな？」「大切なことばは何かな？」など、「学び方5」を意識させるような声掛けをしている。

「学び方5」の内容は、「どうすれば考えやすくなるか」「次に間違えないためにはどうすればいいか」といった学習観（勉強に対する考え方）にもつながり、将来的に、自立した学習者となるために重要となる考え方だ。保護者にも家庭での声掛けに活用してもらうために、「学び方5」を用いた具体的な学習法を紹介する「学び方5だより」を配布している（**図3**）。

「『学び方5』の一つひとつは、これまでも大切にされてきたことであり、先生方は教えてきたと思いますが、それを見える形にして

図3　「学び方５だより」低学年用

「学び方5だより」には、「学び方5」の学習方略を用いて取り組めているノートを紹介し、教師がコメントを添える

＊同校の資料を抜粋して掲載

図2　学習方略「学び方５」

低学年	中・高学年
ま　まちがえたのは、なぜ？	まちがいを大切にする
な　なろう、ミニせんせい	説明してみる
び　ひとこと、コメントをしよう	一言コメントを書く
か　かこう　ずやえ	図や絵にかいて考える
た　たいせつなことばは、なに？	キーワードを見つける

学習方略を子どもが分かりやすく、覚えやすいように「学び方5」と名付けた。カードにして、全クラスに配布、掲示している

＊同校の資料を基に編集部で作成

皆で共有したことに意味があります。教師が当たり前だと思う学び方でも、意識して繰り返し教えることが大切だと考えています」（三宅校長）

◉取り組みの成果

授業と自学を自ら行き来する主体的な学習者を育てたい

研究開始から4年目を迎え、子どもの学習に対する意識や姿勢にはどんな変化が見られるのか。まず、いずれの学年でも、予習にきちんと取り組み、授業に前向きに取り組めるようになった。自主学習においても「学び方5」が定着しつつあり、基礎・基本の学力が向上するなど目に見える成果も表れている。

自分が言いたいことを明快に話せる子どもが増えたとも、教師は感じている。

「授業では、子どもに大切なことを焦点化した上で考えさせています。そうした授業を繰り返し受けることにより、子どもも大切なポイントに絞って話せるようになっているのだと思います」（小早川先生）

主体性の面でも好影響が見られる。

「見通しを持って学び、分かるようになると、『やれば出来る』という自信ややる気につながります。そうした成功体験を積み重ねる中で、『もっと学びたい』という気持ちが生まれ、主体性は育まれるのだと思います」（三宅校長）

同校の最終的な目標は、「教えて考えさせる授業」と「学び方5」の指導の双方のねらいを、子ども自身に理解させ、主体的な学習者を育てることだ。

「予習を通じて、自分が分かったこと、分からないことを自覚し、見通しを持って授業に取り組む。授業では、知識やスキルと共に、効果的に学習するための方略を教わる。そして、家では授業で学んだ内容を再構成し、次の予習につなげる。そうした学習サイクルが理想であり、実際に行う子どもが現れつつあります」（小早川先生）

そのような姿勢を育むために、今後、更に授業改善に取り組んでいく。例えば、「教えて考えさせる授業」は、知識やスキルを教えた上でチャレンジ問題に取り組むことで、基礎・基本の力と共に問題解決の力も育つと捉えている。しかし、「教師の説明」に時間を費やしてしまい、チャレンジ問題の解法の説明にまとまった時間を取れないこともある。そのため、授業構成や教材の研究を更に進めたいと考えている。また、教材研究やワークシートの準備を限られた時間で行うことや、教師が入れ替わっても実践を継続する体制をつくることなども、目下の課題だ。

「教師が一丸となって取り組むことで成果を生み出してきました。これからも、『当たり前のことをしっかりとやる』という気持ちで取り組みを深めていきます」（三宅校長）

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

研究の方針について、責任を持って最終的な決定を下すことを、校長の役割として大切にしています。先生方にはさまざまな考え方があり、それに耳を傾けることは大切です。しかし、必要な場面では校長がリーダーシップを発揮し、学校として進むべき方向を示さなくてはなりません。そして、研究が動き出したら、人材の配置や資料の収集の仕方など、人やモノに関するさまざまなことをマネジメントする力が問われると思っています。

校長　**三宅孝幸**先生

ミドルリーダーの役割

研究の方向性を具体的なイメージとして示し、手立ての共通理解を図ることを心掛けています。自分1人で抱え込まず、低・中・高学年それぞれのリーダーと話し合う時間を定期的に持つようにしています。

常に方向性が合っているかを見つめることを大切にしていますが、時には、先生方の思いが違うこともあります。そのような時は改善策を見いだし、全体でも共有するようにしています。

研究主任　**小早川祐子**先生

「分かる！ 出来る！」授業の実践と学習法の指導で、学力と共に主体性を育む

東京大大学院教育学研究科教授　市川伸一

どのような授業や支援により、子どもが自ら学びに向かおうとする気持ちが育まれるのか。東京大大学院教育学研究科の市川伸一教授が、認知心理学や教育心理学の見地から、学びへの意欲が育つ学習モデルと、具体的な授業のポイントを提示する。

◉「主体的に学ぶ」とは

外発的な動機をきっかけに内発的な動機に結び付ける

昔に比べて子どもの主体性が落ちているとは、一概にいえないと思います。「言われたことはやるけれど、自分から進んでやろうとしない」ことは、以前からいわれてきました。ただ、少なくとも学習に限った場合、あまり熱心に取り組まなくなったといえるかもしれません。その背景には、豊かな社会になり、高学歴を得なくてもある程度の暮らしが出来るようになった結果、保護者や先生からの「勉強しなさい」というプレッシャーが少なくなるなど、外発的な動機の低下があると考えられます。また、「楽しいから学ぶ」というような内発的な動機も、ゲームやマンガなどの楽しいことが増え、学習が相対的に面白くなくなっていることで低下しているように見えます。

「主体的に学ぶ」とは、学びに面白さや意義を感じ、自ら取り組むことです。面白くて学習している子どもは、内発的な動機から学んでいるといえます。一方、必ずしも面白いと思えなくても、「自分にとって必要だからやろう」と、意義を感じて学ぶ子どももいます。これは、内発的動機と外発的動機の中間に位置しますが、自己決定しているという点では主体的に学んでいるといえるでしょう。

しかし、最初から全ての教科に対して面白さや意義を感じさせようとするのは、少々無理があります。そこで、きっかけとして、外発的な動機を用意すると良いと思います。

子どもの頃は、「友だちと一緒に学びたい」「先生が好きだから勉強する」など、人間関係に引き込まれて学習に向かうことがよくあります。これは学習に対する本質的な欲求ではありませんが、人間関係から入って学習しているうちに、学習の面白さや意義に気付くように促すことが出来ます。そのためには、授業で、「分かる！ 出来る！」という楽しさを味わわせたり、どれくらい力が付いたかを実感するような指導をしたり、学んだことが生活や社会でどう役立つかを伝えたりする必要があります。そうした指導によって、社

会に出た時、学校の先生がいなくても、学習そのものに面白さや意義を見いだし、自ら学んで成長できるようになるでしょう。

また、小学校の学習は、抽象的な内容が増える中学校以降に比べると、「勉強しておかないと、大人になったら困るよ」と言えるような、何に役立つかがイメージしやすいものが多いので、そうした点を意識して伝えて、学習の意義に気付かせることが出来ます。ただ、中には「算数は問題を解けると気持ちいいから好き」と、意義に関係なく学ぶ子どももいるので、あまり狭く実用的な意義ばかりを伝えると、「それは自分には関係ない」と、早々に見切りを付けられてしまう場合もあります。学習の面白さや意義は、広く捉えることが大切でしょう。

いちかわ・しんいち◎東京大文学部卒業。文学博士。専門は認知心理学、教育心理学。学習指導に認知心理学の成果を応用する研究として、小中学生向けの学習相談などにも取り組む。主な著書に、『勉強法の科学』（岩波書店）、『学ぶ意欲とスキルを育てる』（小学館）など。

◉主体性を育む授業とは

主体性の育成につながる習得と探究の学習モデル

主体性を引き出すための授業として、私は習得と探究の学習モデルを提唱しています（P.22図）。まず、習得サイクルの授業は、4ステップからなります。

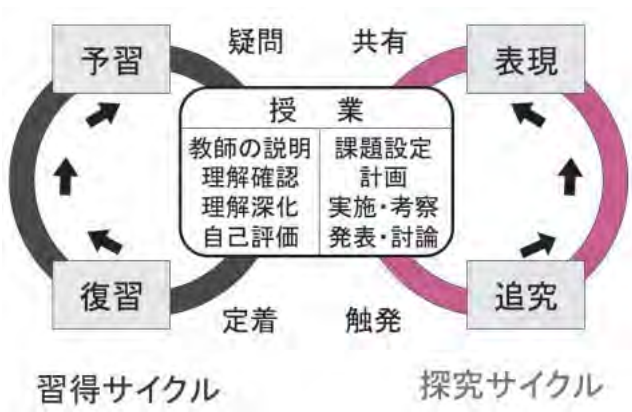
「教師の説明」では、教師がその授業で理解させたい内容を教えます。ポイントは、低学力の子どもでも理解できるように、丁寧に分かりやすく説明することです。「分かる」と実感させて、最後まで授業に参加する意欲を持続させるためです。

「理解確認」では、教えたことを理解しているのかを、ペアやグループで説明し合ったり、類題を解いたりさせて確認します。友だち同士で確認することで、高学力の子どもは教えることを通して更に説明力が付きますし、低学力の子どもは理解が深まります。挙手をして「ここが分かりません」と教師に聞けない子どもでも、友だちになら気軽に質問できるでしょう。

「理解深化」では、教師がその日の目標に合わせて用意した課題に取り組んで理解を深めます。学級全員が解いてみたいと思える面白みがあり、かつ一生懸命に考えれば出来るような課題が理想です。そうした課題を設定するのは容易ではありませんが、学力が高い子どもでも十分に考える必要があるレベルに設定し、分からない子どもには協同解決を促すとよいと思います。教科書の発展問題でもよいですが、学級の理解度や興味に合わせて工夫すると、子どもの意欲がより高まるでしょう。そうした工夫は、普段から教師自身が「ここまで理解させたい」と考える習慣を付けると共に、研究授業などでも「自分だったらこういう課題の出し方をする」といった視点から協議をするとよいと思います。

「自己評価」では、子どもが授業を振り返り、分かったことや分からなかったことを考えます。「力が付いた」と自覚することで自信を深め、学習に前向きな気持ちが生まれます。

図　習得と探究の学習モデル



＊市川教授の資料をそのまま掲載

習得した内容が役立つことを探究を通して実感させる

このように、最初に丁寧に教えて、基礎から順を追って理解を深めていく習得サイクルの授業を、私は「教えて考えさせる授業」と呼んでいます。一方、探究サイクルの授業は、基本的に「考えさせながら教える授業」といえるでしょう。この授業では、子どもが自分で設定や選択をした課題に取り組み、先生は子どもが困っている場合などに支援します。

探究サイクルの授業を充実させるためには、十分な習得によって基礎がしっかり身に付いていなければなりません。スポーツで基礎技術の土台がなければ、試合を楽しめないのと同じことです。最初に自分で課題を見付ける段階でも、そもそも基礎がなければ、自分がやりたいことが分かりません。

ただ、必ずしも習得の後に探究という順序でなくても構いません。最初に「探究」の授業をし、自分に足りない点を自覚させてから「習得」の授業に移ることで、意欲的に取り組める場合もあります。習得してから探究するのは「基礎から積み上げる学び」であり、探究してから習得するのは「基礎に下りていく学び」です。私はどちらの方向があってもよいと思いますが、習得と探究のどちらのサイクルが適しているのかを見極め、めりはりをつけることが大切だと思います。教科学習では、習得8割、探究2割ほどをイメージしていますが、「総合的な学習の時間」は全てが探究の授業になると考えています。

単元の最後などに、習得した内容を用いて探究をするという流れが理想です。一生懸命に学習した内容が、探究の授業を通して「こんなふうに役立つのか」と実感することで、「学校で学ぶことは役に立つ」という気持ちにつながります。

◉主体性を育む指導の工夫

自分を見つめる力が付く高学年から学び方の転換を

高学年頃から学び方を徐々に変化させる必要があることも重要なポイントです。

5年生くらいになると、分かっていることと分かっていないことを自覚するようになり、「自分の学習法は合っているのか」と自問する子どもが増えます。また、授業では難しい内容が増え、それまでの反復中心の学習では次第についていけなくなります。ですから、高学年から、反復による暗記から、意味や構造を考える学習法へと切り換える必要があります。例えば、漢字であれば、それまでの反復中心の学習から、部首の意味を理解して構造的に学べるように指導するのです。

これまで、学習法は個々の子どもに委ねられることが多かったと思いますが、それが学力差が広がる一因になっていたのではないでしょうか。例えば、「学習法講座」のような形で、先生が学習法を教えるとよいと思います。学び方や考え方のちょっとした工夫で、理解が深まることはよくあります。例えば、「10100÷2」の問題では、多くの子どもが筆算を始めます。「大きな数は筆算」という固定観念があるからです。しかし、「1万円と100円を2人で分けると考えてごらん」と言うと、「5000円と50円を足して5050円だ。これなら出来る」と暗算で解けることに気付きます。他にも、上手な暗記の仕方など、工夫できる学び方はいろいろあります。これくらいの工夫は自分でするものと考える方もいますが、なかなか気付けない

子どもも多いので教えるとよいと思います。

効果的な学習法を指導して「報われる努力」へと導く

主体性と学力は、必ずしも一致しないことがあります。例えば、学力は高いのに主体性が見られない子どもは少なくありません。「言われたことはきちんとやるのに……」というタイプです。こういう子どもは、小学校ではそれなりの成績が取れても、中学校以降で伸び悩む可能性があります。自分で計画を立てさせたり、自己診断をさせて弱点を克服するようにしたりして、学習の必要性を自分のこととして実感させるとよいでしょう。

一方、自ら頑張って学習しているのに、学力に結び付かない子どももいます。興味のある内容以外の学習には見向きもしないため、全体として成績が良くないタイプです。また、反復練習だけに取り組み、意味理解の学習が抜け落ちているタイプもよく見られます。本人は学習した気になり、実際に努力もしていますが、こうした学習法では思考力や表現力が求められる問題に太刀打ちできません。努力が報われるように、学習法を教えて正しい方向に導いてあげることも、先生の大切な役割です。

主体性がより求められるのが、家庭学習です。現状を見ると予習があまり重視されていませんが、これは非常にもったいないと考えています。大人も同じですが、難しい内容は1回教えられただけでは理解できません。あらかじめ教科書を読み、何を学ぶのかを知り、分からなかったことを意識して授業に臨むことで深い理解につながります。予習は、分からなかったことに付箋を貼るだけで十分で、1教科につき数分で済みますから、家庭学習に加えていただくとよいと思います。

最初から家庭で予習をさせるのは難しいかもしれませんので、授業の冒頭の5分を「予習タイム」にして、慣れてきたら宿題にするというのでもよいでしょう。3、4年生から予習のトレーニングを始め、高学年で習慣化させるのが理想です。

◉これからの時代に大切な主体性

学校の先生がいなくても学び続けられる力を付ける

激しく変化する社会では、ますます主体性が求められるようになります。知識基盤社会といわれる社会を生きていくためには、大学までに得た知識では追い付けなくなり、いろいろなことを自分から学び続けなくてはなりません。ICTを上手に活用して自分をパワーアップさせる術を身に付けたり、グローバル社会において多様な文化や知識に触れ、その中で自分の考えをしっかりと持てる力も大切になります。

私は、主体性に支えられた育ちに関して、次のようなイメージを持っています。小学校低学年は、教科学習の多くが授業で完結する状態です。それが中学年以降、授業を超えた子ども自身の学びの割合が次第に大きくなっていきます。中学校、高校、大学と進むにつれて子ども自身の学びはますます大きくなり、やがて社会に出ると授業はなくなります。その頃には、先生の代わりに、本やインターネットから情報を得たり、人とかかわったりしながら学び、自分を成長させる力が身に付いているのです。そのように、主体性を育むことは、子どもが自立して未来を生き抜く力につながると意識し、指導を工夫されるとよいと思います。

特集取材を終えて

「言われたことはやるけれど、それ以上のことはやらない」

これまでの取材で先生に子どもの様子を伺うと、多くの学校から挙げられる課題でした。その原因に「保護者の関与」が強まっていると感じている先生も少なくありませんでした。しかし、今回の取材を通じて、子どもの主体性が落ちているというよりも、これからの時代に求められる力として主体性が相対的に大きくなっているのだと感じました。そして、点数に表れる学力には直結しなくても、見通しを与えたり、学び方を工夫したりして、子どもが自ら「もっと知りたい、学びたい」と思えるような環境を整えることによって、主体的に学ぶ力が育まれていくように思いました。

VIEW21小学版編集長　杉田美穂

特別レポート

小・中・高校の12年間を通じて教育課題を考え、語り合う

「Teachers' cafe」第1回ワークショップ報告

特集テーマである「主体的に学ぶ力」は、小学校段階だけでなく、中学校、高校と子どもの成長を連続的に捉えて、指導のあり方を考えることが大切であろう。そのような課題意識の下、ベネッセ教育総合研究所は、学校種を超えて先生方が語り合うワークショップを開催した。

学校種を超えて子どもの未来を考える

グローバル化や情報化など、今後の社会環境の変化に対応し、「生きる力」を育むためには、学校種を超えて、子どもの成長を連続的に捉えていくことが一層重要になる。教育現場ではこの必要性を踏まえた取り組みが行われており、『VIEW21』小・中・高校版でも、多くの小中連携、中高連携などの事例を紹介してきた。しかし、先生方へのアンケートなどから、自治体等の公的な働き掛けがないと、学校種を超えて先生方が直接語り合う機会を持つのはなかなか難しいことが見えてきた。

そこで、ベネッセ教育総合研究所は、小・中・高校の先生方がさまざまな教育テーマに

ワークショップの流れ

13:00 オリエンテーション、自己紹介

14:00 ワールドカフェ形式（＊）で「現状を知り合う」

異なる学校種の先生４～ 5人でグループをつくり、語り合う。1テーマ2ラウンド、計４ラウンドを、各回グループを替えながら行った。

＊ワールドカフェ形式：組み合わせを替えながら、少人数での会話を積み重ね、組織的な探求につなげていく対話の手法。

◎**1・2ラウンド**（各20分）

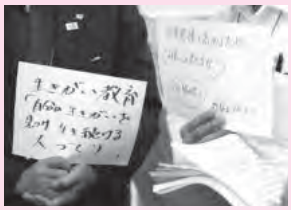
「12年間を通した学び」を考える上で小学校、中学校、高校それぞれについて、どんな「良さ」「問題点」を感じているか？

◎**3・4ラウンド**（各15分）

「12年間を通した学び」がどうなれば理想的だと思うか？　そのためには何が必要か？

15:40 休憩

15:50 「オピニオンをつくる」



◎「12年間を通したより良い学びのために、教師（私たち）が出来ること」として、話し合いたいテーマを個々で考えて提示

◎テーマに沿ってチームを組み、チームごとにオピニオンをつくる

17:00 発表

◎5チームがそれぞれのオピニオンを発表

17:20 まとめ

Teachers' cafe
第1回ワークショップ概要

◎**目的**　小学校、中学校、高校の先生方が率直に語り合い、「12年間を通したより良い学びのために、教師が出来ること」を共に考え、現場教師発のオピニオンとしてウェブサイトなどを通じて発信すること

◎**日時**　2013年9月28日（土）13～18時

◎**参加者**　全国の先生方19人（小学校7人、中学校6人、高校・大学6人）

◎**募集方法**　『VIEW21』小学版・中学版・高校版の各読者モニターへのご案内など

◎**会場**　（株）ベネッセコーポレーション新宿オフィス

◎**主催**　ベネッセ教育総合研究所「Teachers' cafe」事務局

◎**企画運営協力・当日ファシリテート**　與良（よら）昌浩氏（株式会社もくてき）、宮崎圭介氏（株式会社スコラ・コンサルト）

主体的に学ぶ力を育む――学び方の工夫で学習意欲を高める

ついて率直に語り合い、ワークショップなどを通じてオピニオンをつくり上げていく「Teachers' cafe」を企画した。

見えてきた小中高をつなぐキーワード

第1回ワークショップは「12年間を通したより良い学び」をテーマに、2013年9月に開催。全国から19人の先生方が参加した。やや緊張した先生方の雰囲気は、「現状を知り合う」セッションを機に変化していった。開始直後は、他の学校種に対する疑問や要望に偏りがちだった議論は、互いの状況や思いが分かるにつれ、連携して子どもを育むための検討になっていった。その後、個々の関心に沿って、「志」「学力保障」「生きぬく力」「学びの意欲」「キャリア教育」の5つのチームを編成し、12年間で実現させたいことやそのためのアイデアをオピニオンとしてまとめるところまで共通理解が進んだ。

議論が深まっていった背景には、「より良い学び」のためのキーワードを、学校種を超えて共有できたことがあろう。「学び続ける意欲」「自尊感情」「伝え合う力」「教師の専門性」など、学校種ごとに用いる言葉が違ったとしても、目指す子どもの姿、そのための指導への課題意識や熱意は同じだと確認できた。それぞれの学校種でどのように指導し、12年間をつなげていくのかは今後の課題だ。今回の議論を生かしながら、先生方と共に考えていきたい。

当日の様子や先生方のオピニオンは ウェブサイトで詳しくご覧いただけます!

ワークショップの様子や先生方が作成したオピニオンなどは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト内「Teachers' cafe通信」に掲載しています。ご意見がございましたら、フェイスブックやツイッターでぜひお寄せください。また、2014年2月開催予定の第2回ワークショップについても随時お伝えしていきます。

http://berd.benesse.jp/tcafe/

ベネッセ教育総合研究所は 幼稚園・保育所、小学校、中学校、高校、大学の 先生方を支援しています!

ベネッセ教育総合研究所は、園から大学までの教育・保育に携わる方々を対象とした教育情報誌を刊行しています。記事は全て、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトにPDFで掲載しています。ぜひ一度、ご覧ください。

http://berd.benesse.jp/ ＞教育情報

＊新規での冊子のご送付のご依頼は承っていません。ご了承ください。

参加した先生方からのご意見・ご感想

◎「教師が率直に語り合い、オピニオンをつくる」ことは、とても大切だと思う。ボトムアップで「未来の教育」に貢献できるとしたら、教師冥利に尽きる。（栃木県／小学校）

◎異なる地域であっても、基本的に同じ方向性だと感じた。12年間を見通すためには、校種が違う先生方ともっと踏み込んだ意見交換があるとよいと思う。（香川県／小学校）

◎ワークショップでは、時間が経つのが実に早く感じられた。今後、近隣の小・中学校で交流会があるので、この内容の一端は話し合いの中で還元していきたい。まずは、自分の足元から一歩一歩である。（北海道／中学校）

◎教育について多様な考え方があること、自分の知らないことが小学校や高校にたくさんあることを学んだ。出来れば、このような場を今後も設けてほしい。（岐阜県／中学校）

◎学校種の違いを感じることなく、いろいろな先生方と1日を過ごせた。さまざまな教育活動に取り組む先生方の情熱は同じものだからだろう。校種を超えて縦にもニューロンを伸ばしていけたら、私たち教師の努力は、よりストレートに生徒に届くと感じた。（岩手県／高校）

◎全国の先生方から大いに刺激を受けると共に、直面する一つひとつの課題を克服するためには校種を超えた協力が欠かせないことを実感した。これを機に先生方と連絡を取り合って小中高の連携のあり方を考えていきたい。（福井県／高校）

動画の予習で臨む反転授業が密度の濃い45分をつくり出す

宮城県富谷町立東向陽台小学校

教育におけるICTの導入は始まったばかりだが、諸外国、あるいは日本の高等教育機関ではICTの特性を活用した取り組みの1つとして1人で出来ることは家庭で学び、学校では集団による学習を重視して、理解の深化を図る「反転授業」が試みられている。新しい授業形態の可能性を探るために今、小学校でも「反転授業」に挑戦する学校がある。

富谷町立東向陽台小学校の佐藤靖泰先生が受け持つ6年3組では、2013年10月、算数の比例と反比例の単元（全13時間）で「反転授業」を行った。これはICTを活用した授業形態の1つで、授業での課題解決に必要な知識の説明を動画にまとめ、受講者は事前にそれを見て予習し、授業では応用課題やグループ学習などを行い、理解を深めることに重点を置くというものだ。

佐藤先生の場合、1本5分程度の予習用動画を、比例で6本、反比例で4本作成し、学級全員に1人1台貸与されているタブレットPCにコピーした。子どもは授業前日に家で動画を見て、内容をノートにまとめ、更に「分かったこと」「分からなかったこと」を書き出す（**写真1**）。

授業では、最初に子どもが予習したノートを見て自分の理解度を確認してから、本時の課題に入る。一斉での学習に加え、個別学習、ペア学習、グループ学習を行うが、時間にゆとりがあるため、子どもたちはどの活動にもじっくり取り組める（**写真2**）。

「いつも10分程費やしていた導入の説明を省き、子ども自身が活動して理解を深める学習を充実させました。子どもには予習によって問題に取り組むための武器が備わっており、友だちの発言にも自分なりの反応が出来るので、活発なグループ学習が行われます。その間に、私は教室を回りながら理解度を見取り、個別指導に当たれます。クラス全員が着実に前に進める授業が出来ると感じています」（佐藤先生）

先生の声を聞きながら映像を見て予習

この形式で授業を行っているのは、現在、校内で佐藤先生だけだ。東北学院大の稲垣忠准教授から、反転授業に関する協同研究の打診を受けたことがきっかけだったという。同校は11年度からICTを活用した授業改善の研究に取り組んでおり、協同研究の成果が他の教師の指導力向上につながると考えて承諾したと、相澤恵子校長は話す。

「学級分のタブレットPCや無線LANの整備の都合上、今は6年3組だけの取り組みですが、研究の一環として、他の先生方も周りの子どもたちも注目しています。新しい授業形態に目を向けると共に、今の

＊佐藤先生の反転授業の様子は、You Tube® で公開されています

School Data

宮城県富谷町立東向陽台小学校

◎ 1980（昭和55）年開校。「しなやかな心とたくましい体をもち、生きる知恵を学ぶ子どもの育成」を学校教育目標に、地域交流や図書室を活用した学習などを重視。**校長** 相澤恵子先生／**児童数** 1016人／**学級数** 33学級（うち特別支援学級2）／**所在地** 〒981-3332 宮城県黒川郡富谷町明石台1-37-13 **TEL** 022-358-4577／**URL** http://www.town.tomiya.miyagi.jp/school/top.aspx?faccd=SC03

Teachers

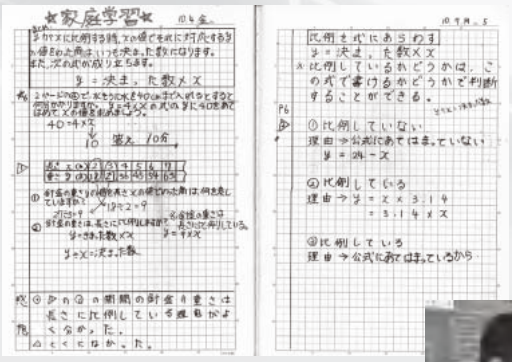
富谷町立東向陽台小学校校長
相澤惠子
あいざわ・けいこ　「子どもも先生も夢を持って輝けるような学校づくりを心掛けている」

富谷町立東向陽台小学校
佐藤靖泰
さとう・やすひろ　6学年主任。情報教育主任。「ICTをきっかけに、子どもも教師も伸びていくような授業づくりをしていきたい」

環境でその考えを生かした工夫が他の先生方から生まれることも期待しています」

反転授業の導入初年度の昨年は、6年生算数の比例のみで行った。予習用動画は、プラズマ型電子黒板にデジタル教科書を映し、その内容を佐藤先生が解説する様子を撮影。2年目となる今年は、比例は昨年と同じ映像を用い、新たに加えた反比例は、デジタル教科書の該当ページを静止画にし、先生の解説の声に合わせて書き込みが表示される動画を教室で収録した。

「予習用動画の収録は、実際に子どもに教える気持ちで、教室で行いました。収録に時間はあまり掛かりませんが、毎回の授業に必要な知識を漏れなく盛り込めるよう、単元構成と教材研究には時間を掛けました。改めて、授業の導入での指導内容や単元全体を見直すことにつながりました」（佐藤先生）



上／写真1　子どものノート。左ページが予習で、右ページが授業でまとめた内容だ。予習の重要性を実感している子どももいるという　右／写真2　グループ学習では、発表用として1人のタブレットPCにグループの考えを書き込む

子どもを見取る力や授業力が向上

子どもは、授業前に「分かったこと」「分からなかったこと」を認識している。だからこそ、分からなかった子どもは、「ここが分からないから教えて」と友だちに言える。一方、分かった子どもは、ノートにまとめる過程で自分の考えがある程度整理されるので、自信を持って答えられる。予習によって子どもに学び合いの前提が整うため、より効果的な学習活動になるという。

予習をしていない子どもがいたら休み時間に動画を見るように促すが、予習が出来なかった場合の対応にも配慮している。

「予習していない子どもにも、机間指導で柔軟に対応しています。予習により生み出された時間を、学び合いの充実や個別指導に充てられる分、教師には子どもを見取る力がいっそう必要になり、それに応じてどう授業を進めるかという授業の構成力が鍛えられると感じています」（佐藤先生）

12年の子どもと保護者へのアンケートでは、反転授業を行った期間の家庭学習時間が普段の1・5倍に増えた。普段の宿題の代わりに予習を課すため、家庭学習の総量は他の時期とほとんど変わらないが、ノートにまとめるために動画を繰り返し見たり、復習で動画を見たりすることが要因ではないかと、佐藤先生は分析している。また、比例・反比例の単元テストの平均点は、他の単元より良かった。佐藤先生は、「算数が苦手でも、きちんと予習をして授業に臨むことで、知識や技能が身に付くようです」と、基礎学力の伸びを感じている。

「反転授業は新しい取り組みで、さまざまな意見があるでしょう。しかし、これからの授業のあり方を探る方法の1つであり、子どもの明日につながっていくのではないかと考えます」（相澤校長）

これからの教育に生かせる視点

◎「学校は子どもたちが集まる場所。この場を有効、濃密に活用したい」という思いから始まった取り組みは、本時の課題にじっくり取り組む環境をつくり出し、結果として子ども一人ひとりを見取るゆとりを生み、指導の重点化を可能にしました。「反転授業」と聞くと大学などの高等教育機関での実践、大掛かりな授業改善のための手法と受け取られがちですが、小学校でもこのような形であれば成立するのだと実感しました。

ベネッセ教育総合研究所　情報編集室
環境分析グループリーダー　黒木研史

つながる

学校と家庭の学び

家庭と共に子どもの自信を育み安心した進級・進学につなげる

福岡県北九州市立企救丘小学校

北九州市立企救丘小学校では、子どもの自己肯定感を高めるために少人数制の学習指導、コミュニケーション能力を伸ばすために「対人スキルアップ学習」を行っている。子どもや保護者の悩みを聞くことで取り組みの成果を測りながら、子どもの心に寄り添った結果、学習に自信を持ち、他者を気遣う子どもが増えているという。

子どもの自己肯定感とコミュニケーション能力を育む

北九州市立企救丘小学校は、児童数が900人を超える大規模校だ。素直で人懐こく、学校を訪れた人にも積極的にあいさつをする子どもが多い。ただ、子どもへのアンケート結果などからは、自尊感情が低い様子が見て取れた。また、核家族化が進み、固定された人間関係の中で育つことなどにより、ケンカをしても解決方法が分からないなど、多くの友だちとうまく意思を疎通できない子どもが増えていたという。

そこで、数年前から子どもの自己肯定感とコミュニケーション能力を高めるための活動に力を入れている。

取り組みの柱は2つある。1つめは少人数制の学習指導だ。全学年の算数の授業では、つまずく子どもが多い単元でクラスを二分し、担任と特別加配の教師が指導する。少人数制指導によって子どもの自尊感情を高めたいと、青木哲也校長は話す。

「教師の目を届きやすくすることで、つまずいていれば励まし、問題が解ければ褒めるというように、子どもの変化に応じた声掛けがしやすくなると考えました。自分の頑張りが教師に認められれば、子どもはうれしいでしょうし、『やればできる』という自信も付き、前向きに学習に取り組めるようになるはずです」

更に、6年生の3学期には中学校への進学を見据え、成績と子どもの希望などを基に5クラスを7～8クラスに編成し直し、国語と算数で習熟度別授業を行っている。担任と特別加配の教師に加え、管理職も指導に当たると、永尾敦子副校長は話す。

「小学校段階での学習内容は、社会で求められる知識の根幹となります。しっかり定着させてから中学校に送り出すために、管理職も力を合わせる責任があると考えました」

取り組みの2つめの柱は、「対人スキルアップ学習」だ。子どものコミュニケーション能力を伸ばすために、他者の良いところを認めたり、他者を思いやったりする表現を学ぶロールプレイやグループワークなどを、朝と帰りのホームルームや授業冒頭などの短い時間を中心に行っている。週1回が基本だが、学年やクラスの課題に応じられるように、実

施は学年団や担任に任せている。

教務・研究主任の髙瀬（たかせ）隆行先生は、他者とうまくコミュニケーションを取るためには何が大切かを、子どもが実感できるように、取り組みを工夫していると話す。

「ロールプレイは、実際に学校で起こりそうな状況を想定して行っています。例えば、遊んでいて友だちにボールをぶつけてしまったという設定で、子どもがボールをぶつけた役とぶつけられた役に分かれて演じてみて、自分だったらどうしてほしいかを話し合います。他者への気遣いをただ知識として学ぶだけでなく、実感することで、実践につなげていきたいと考えています」

子どもの悩みを把握する「心の相談アンケート」

「心の相談アンケート」（P.30図）も、同校が力を入れている取り組みの1つだ。これは、学習や対人関係などについて悩みや不安があるか、あればどのようなことかを子どもに尋ねるアンケートで、学期に1度ずつ、年3回行う。青木校長は、この意義を次のように話す。

「担任が子どもの悩みや不安に早めに気付き、対策を立てられるようにしたいと考えました。子どもが安心して回答できるように、必ず秘密を守る約束をしてほしいと、先生方に伝えています。また、子どもの回答から教育活動の課題を読み取ることも出来るので、少人数制の学習指導や『対人スキルアップ学習』の内容を改善するための資料にしています」

以前から担任は2学期に子ども全員と個人面談を行っているが、「心の相談アンケート」を始めてからは、回答が気になる子どもとは1・3学期にも個人面談を行うようになった。更に、子どもには担任以外にも相談できることを伝え、子どもに合うチャンネルを増やす工夫もしている。

「本校では毎年クラス替えを行うため、年度初めは人間関係について悩む子どもがどの学年にもいます。1学期の面談では主にその解決を図っています。2学期の面談では学習面について話すことが多くなり、子どもの努力を認めたり、『もう少し頑張ろう』と励ましたりしています。3学期の面談では子どもの抱えている課題の解決を図ると共に、その内容を次の学年や中学校の先生に申し送り、子どもが安心して進級・進学できるようにしています」（髙瀬先生）

担任は、「心の相談アンケート」の集計結果は学級通信で、面談で子どもと話したことは保護者会後の懇親会などで保護者に伝えている。家庭と密に連絡を取ることは大切だと、谷英明教頭は話す。

「学校にとって、保護者は共に子どもを育てるパートナーです。子どもの成長だけでなく、課題もこまめに伝えることで、学校の教育活動に対する家庭での理解が深まると思います。子どものありのままの姿が保護者に分かるように、気になることがあればすぐに電話をしたり、家庭を訪問したりしてほしいと、先生方に伝えています」

また、2月は保護者向けの教育相談月間とし、希望者と青木校長が面談をしている。

「進級・進学を控えた時期ですから、子どもの学習面や生活面などについて不安を抱いている保護者もいます。担任だけでなく、学校運営の責任者である校長も、保護者とじっくり話

SCHOOL DATA

福岡県北九州市立企救丘小学校

◎1973（昭和48）年開校。東に豊後水道を望む、北九州市中央部の丘陵地帯に位置する。児童数が1000人を超えた時期もある大規模校だが、子どもの個性を尊重しようと、「豊かな心を持ち、自己のよさが発揮でき、一人一人が生き生きと輝く子どもを育成する」を教育目標に掲げる。地域住民が校内巡視、図書室の図書の貸し出しや整理を行うなど、地域との結び付きも強い。

校長　青木哲也先生
児童数　910人
学級数　30学級（うち特別支援学級4）
所在地　〒802-0981
福岡県北九州市小倉南区企救丘2-1-1
TEL　093-962-0414
URL　http://www.kita9.ed.jp/kikugaoka-e/

北九州市立企救丘小学校校長
青木哲也
あおき・てつや
「子どもが友だちとも先生方とも楽しい思い出をたくさん残せる学校をつくりたい」

北九州市立企救丘小学校副校長
永尾敦子
ながお・あつこ
「子ども一人ひとりが自分の居場所を持ち、明るく元気に通える学校にしたい」

北九州市立企救丘小学校教頭
谷　英明
たに・ひであき
「子ども同士が高め合える環境を整えられるように、先生方を支えていきたい」

北九州市立企救丘小学校
髙瀬隆行
たかせ・たかゆき
教務・研究主任。「自分の経験を若い先生方に伝え、サポートしていきたい」

す機会をつくっています」（青木校長）

自己肯定感の高まりが他者への気遣いにつながる

少人数制の学習指導に取り組み始めてから、どの子どもも積極的に授業に参加するようになった。「心の相談アンケート」でも、「授業が楽しい」「問題が解けることが面白い」といった声が多く上がるようになった。

「少人数制の授業によって、子どもは『先生がしっかり見ていてくれている』と感じるようです。『褒められるようにもっと頑張ろう』という気持ちと共に、自己肯定感も高まっていると思います。普段の授業でも、以前は自分からは発言することが少なかった子どもが率先して手を挙げるようになるなど、学習意欲が高まっていると感じます」（永尾副校長）

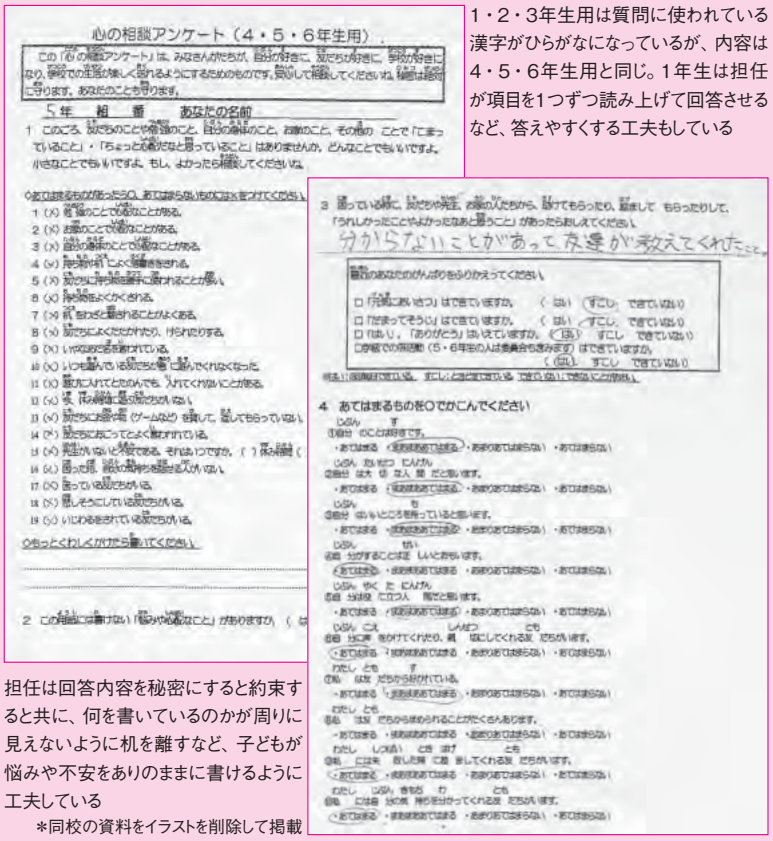
コミュニケーション能力も伸びている。

「自分の良いところにたくさん気付き、自分を認められるようになったことで、他者を尊重しようという気持ちも生まれているのだと思います。『対人スキルアップ学習』で学んだ友だちへの気遣いを、授業や生活場面などで実践する子どもも増えています」（高瀬先生）

年度末に保護者に行う学校評価アンケートでは、少人数制の学習指導や「対人スキルアップ学習」への肯定的意見が9割以上を占める。青木校長は今後について次のように話す。

「子どもの意欲が高まっている今、学習面では学年末に学力テストを活用するなどして、進級・進学に不安のない学力を定着させたいと考えています。また、保護者への発信力の強化にも力を入れようとしています。保護者の教育相談を常時受け付けることで、保護者の教育力や学校への信頼感を高め、互いの連携を強めたいと思います。子どもが自信を持って成長していく姿を、保護者と共に見守れるような学校を目指します」

図　心の相談アンケート（4・5・6年生用）



1・2・3年生用は質問に使われている漢字がひらがなになっているが、内容は4・5・6年生用と同じ。1年生は担任が項目を1つずつ読み上げて回答させるなど、答えやすくする工夫もしている

担任は回答内容を秘密にすると約束すると共に、何を書いているのかが周りに見えないように机を離すなど、子どもが悩みや不安をありのままに書けるように工夫している

＊同校の資料をイラストを削除して掲載

2~3月の進級・進学前に授業や保護者会で使える教材、冊子を無料でご提供します

未来に進むちからを育むプロジェクト。
ベネッセの学び応援

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2012年度は、のべ15,000校から約160万冊ものお申し込みをいただきました。

2013年度は、各学年個別に、1年間を振り返って次の学年への意欲を向上させる冊子などを無料でご提供いたします。重要単元を復習できる「おさらい問題」が入っており、学年末の授業などでご活用いただけます。

また、冊子内に、保護者向けに進級前の心構えについての情報もご用意しております。

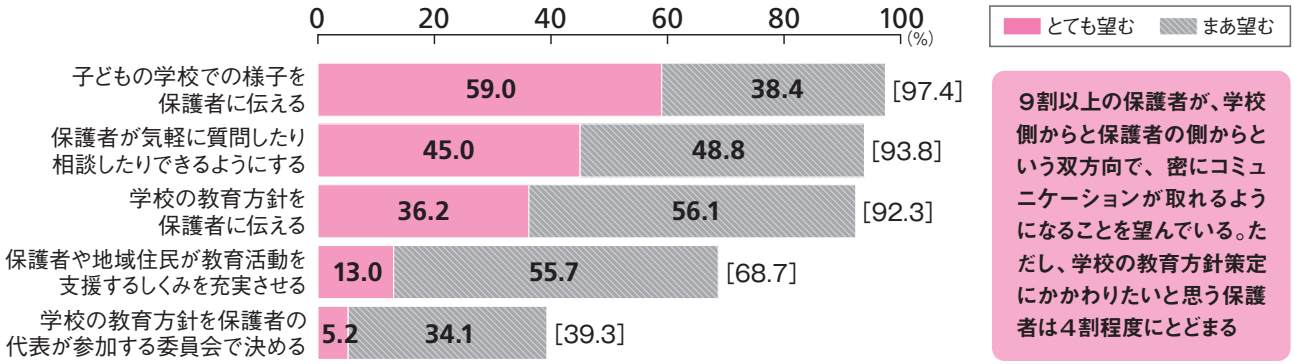
ただ今、お申し込み受付中です。ぜひ貴校の教育活動にお役立てください。

お申し込み締め切り 2014年 2/28 金

学校&家庭 学び応援プロジェクト ホームページ　http://www.benesse.co.jp/manabiouen/

保護者は双方向でのコミュニケーションを望む

学校に望むこと（回答：全国の公立の小学２年生、小学５年生の子どもをもつ保護者）



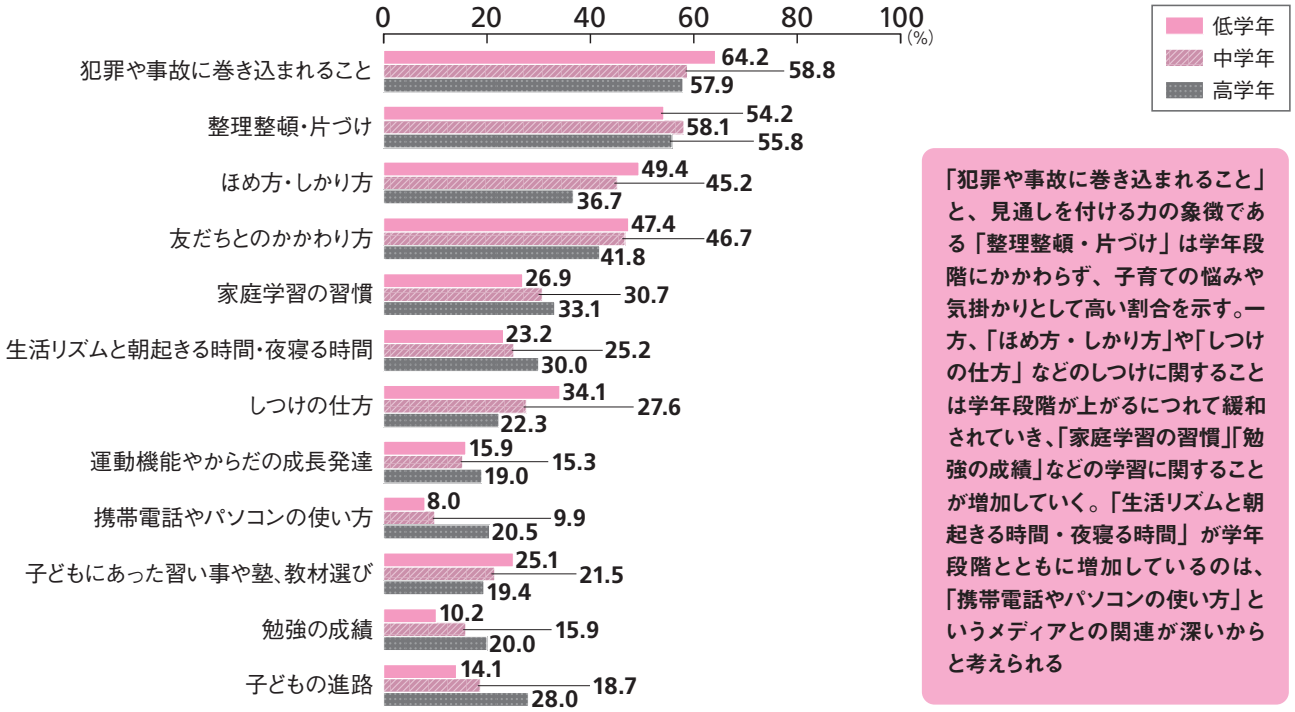
９割以上の保護者が、学校側からと保護者の側からという双方向で、密にコミュニケーションが取れるようになることを望んでいる。ただし、学校の教育方針策定にかかわりたいと思う保護者は４割程度にとどまる

注１）[　　]内は「とても望む」と「まあ望む」の合計　　注２）5項目を抜粋

出典：ベネッセ教育総合研究所 朝日新聞社共同調査「学校教育に対する保護者の意識調査2012」(2013)
調査時期は、2012年11月～2013年1月、調査対象は、全国の公立の小学2年生・小学5年生の子どもをもつ保護者3,938人、調査方法は学校通しによる家庭での自記式質問紙調査

学年段階が上がるにつれ、しつけの悩みが減少し、学習の悩みが増加

子育ての悩み・気掛かり（回答：全国の小学1年生～6年生の子どもをもつ母親）



「犯罪や事故に巻き込まれること」と、見通しを付ける力の象徴である「整理整頓・片づけ」は学年段階にかかわらず、子育ての悩みや気掛かりとして高い割合を示す。一方、「ほめ方・しかり方」や「しつけの仕方」などのしつけに関することは学年段階が上がるにつれて緩和されていき、「家庭学習の習慣」「勉強の成績」などの学習に関することが増加していく。「生活リズムと朝起きる時間・夜寝る時間」が学年段階とともに増加しているのは、「携帯電話やパソコンの使い方」というメディアとの関連が深いからと考えられる

注１）複数回答　　注２）12項目を抜粋

出典：ベネッセ教育総合研究所「第4回子育て生活基本調査（小中版）」(2012)
調査時期は、2011年9月、調査対象は、全国の小学1年生～中学3年生の子どもをもつ保護者8,079人（うち分析対象は小学生の母親4,191人（低学年1,357人、中学年1,440人、高学年1,394人））、調査方法は学校通しによる家庭での自記式質問紙調査

上記の関連データはコチラ！
http://berd.benesse.jp/
＊「調査・教育データ」コーナーをご覧ください

読者のページ
Reader's VIEW

2013 Vol.3特集「家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

＊『VIEW21』小学版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト（http://berd.benesse.jp）でご覧いただけます。

◎家庭学習の充実は、本校でも喫緊の課題です。８割の子どもに有効な方法であっても、本当に改善しなくてはならない問題を抱えているのは残りの２割であり、この子どもたちにとっても有効な方法にしなければならないと思います。［京都府／Ｒ小学校］

◎本校は小中一貫校で、９年生（中学３年生）が自分の進路実現に向けて計画を立てて自学自習に取り組めるように、時間の目安などを示した家庭学習の手引きを小学１年生から配布しています。しかし、なかなか進まないのが現状であり、まだまだ受け身なところがあります。まず日々の授業に興味を持たせること、保護者への十分な説明、家庭学習計画やチェックカードの活用などによる振り返り、昼学習、意欲を高めるための次の授業に結び付く課題提示など、まだまだ工夫できることがあると分かりました。［大阪府／Ｔ小学校］

◎神奈川県川崎市立南百合丘小学校のＩＣＴの活用は、時代の先端を行く取り組みであり、強い関心を持ちました。ＩＣＴは若手教師が得意かと思いますが、授業本来の進め方をベテラン教師と融合していけば、良い授業が出来ると思いました。従来のノートやプリントが適している活動があると気付くことが、今後の発展につながると思います。決してＩＣＴありきではなく、子どもありきであることが大切だと思います。［神奈川県／Ｈ小学校］

◎早稲田大教職大学院の田中博之教授が提示された家庭学習のあり方は、現在の状況を踏まえた分かりやすいものでした。家庭学習と授業の内容がリンクされることが土台であり、それによる活用型学力の育成や自己マネジメント力の育成などが大切であること、また保護者の３つの教育的機能をしっかり認識した上で働き掛けることの大切さが分かりました。［鹿児島県／Ｋ小学校］

◎「私を育てたあの時代、あの出会い」の京都府京都市立高倉小学校の門田（もんでん）真澄校長の記事に書かれていた、「校長として教職員を大切にすれば、教職員は子どもを大切にする」という言葉が心に強く響きました。経営の基本にも通じると思います。社長が社員を大切にすると社員はお客様を大切にします。例えば結果を出している民間企業の社員との交流を深めて、授業力だけでなく、幅広く識見を深めることで、子どもや保護者の信頼を得られるのではないかと改めて感じました。［北海道／Ｍ小学校］

◎「Benesse 発　これからの教育」で、東京都多摩市立南鶴牧小学校が実践されている、外国の同世代の子どもと行う協働作業が心に残りました。文化や生活を学ぶのではなく、外国の子どもと協働して制作することで、結果的に自国の文化と相手の文化を比較しながら、肯定的に学ぶことが出来るのだと思いました。［岩手県／Ｔ小学校］

◎小中連携の意義はよく聞き、また、中学校の教師が小学校で外国語活動の授業をする例もよくあります。しかし、「つながる学校と家庭の学び」の佐賀県伊万里市立南波多（みなみはた）小学校のように、小学校の教師が「乗り入れ授業」をする例はあまり聞いたことがなく、保護者も巻き込んだ実践は参考になりました。［山梨県／Ｉ小学校］

子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、
子どもたちの成長に寄り添う研究と
社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、
今と未来を“よく生きる”ことに
貢献することを目指しています。

ベネッセ教育総合研究所

編集後記

今回の取材でも、さまざまな学校の授業や日常の様子を拝見させていただきました。ある学校では玄関をくぐるなり、「おはようございます！」と大勢の子どもたちからのあいさつと笑顔で歓迎され、ある学校では休み時間に教室が揺れるほどの歌声が響いていました。学校生活における子どもたちの様子一つひとつが、先生の日頃のご指導や家庭・地域との連携の賜物（たまもの）であると感じました。（杉田）

VIEW21 小学版 2013 Vol.4　2014年2月17日発行／通巻第39号

発行人　岡田晴奈
編集人　谷山和成
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
ベネッセ教育総合研究所
印刷製本　凸版印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ、丹羽三千代
執筆協力　二宮良太
撮影協力　荒川潤、川上一生、南弘幸
イラスト協力　幸剛

◎お問い合わせ先
情報編集室
〒206-8686
東京都多摩市落合1-34
電話　042-311-3390

©Benesse Corporation 2014

色とりどりの学びの情景

授業と体験の両輪で育む心

表紙の学校　熊本県山江（やまえ）村立山田小学校

毎年３月に開かれる学習発表会のテーマは「命」だ。学校の重点目標に「命を大切にする心」「人にやさしくする心」「ものを大切にする心」を掲げる

栗の里として知られる山江村。農家の方を招き、栗の種類や栗作りが盛んになった背景を聞いた後、栗拾いを体験。いがに手こずりながらも子どもたちは夢中で拾った

毎年５月には校内の茶畑で、保育園児から高齢者まで地域総出で茶摘み会を開く。集めた生葉は地域の方に製茶してもらい、子どもたちが福祉施設を訪れてプレゼントしたり、地域の祭りで販売したりする

山江村立山田小学校は、子どもが人と直接触れ合い、人間関係を築いてこそ、思いやりの心が育まれると考え、道徳での学びを実践する場として体験活動に力を入れる。地域との交流が盛んで、毎月15日は「学校へ行こうデー」。地域の生産者による栗まんじゅう作り、近隣高校のロボット部が訪れての操作実演などを行った。隣接する保育園や高齢者施設には、子どもたちが定期的に訪れ、触れ合いを重ねる。

体験活動として最も重視するのは学級会だ。１年生から教師が支援しながらも子ども同士で話し合う経験を積み、高学年にもなると子どもだけで話し合う。３月の学習発表会では、「命」をテーマにつくり上げた劇や歌など披露し、授業と体験の集大成とする。

６月には体育委員会が「学校みんなが仲良くなるために」と考え、「大相撲山田場所」を開いた。全児童が正々堂々と戦う姿に、皆の温かい声援が響いた。

2014年2月17日発行／通巻第39号
発行人 岡田晴奈　編集人 谷山和成　発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2014

過去1年間の特集テーマ
Back Number

2013
Vol.3 家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす
Vol.2 自ら表現したくなる授業づくり
Vol.1 授業で高める自己肯定感

2012
Vol.4 学びに向かう力を伸ばす新1年生指導

全ての記事を、ウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます
http://berd.benesse.jp または ベネッセ　研究 で 検索
2014年度 Vol.1 は 2014年6月上旬発行（予定）です